

プーチン最後の聖戦

北野幸伯

集英社インターナショナル ウェブ立ち読み

ロシア最強リーダーが企むアメリカ崩壊シナリオとは？

プーチン 最後の聖戦

北野幸伯

プーチン
最後の聖戦
目次

第1章 神への道

プーチンはいかにしてロシアの絶対権力者になったのか？

- スパイを夢見た少年 ————— 20
- 諜報員として冷戦の最前線へ ————— 22
- ゴルバチョフ時代のソ連とは ————— 24
- 三〇代後半から驚異のスピード出世 ————— 25
- 「バウチャー」という紙切れが生んだ、すさまじい格差社会 ————— 27
- ユダヤ系新興財閥（成金軍団）が台頭し、ロシア経済を支配 ————— 31
- 「クレムリンのゴッドファーザー」、ベレゾフスキーとは ————— 32
- FSB長官プーチン、ベレゾフスキーに接近 ————— 36
- いよいよ首相の座へ ————— 41
- 大統領プーチン、国内統治に向けて「革命的な大改革」 ————— 43
- 新興財閥の大物、グシンスキーを排除 ————— 46
- プーチン支持だったベレゾフスキーも反プーチンへ ————— 48
- プーチン、いっせいに新興財閥狩りを開始 ————— 50
- ベレゾフスキーの敗北 ————— 54

- プーチン、新興財閥軍団をついに支配下に ————— 58
- 新興財閥軍団は、最初からKGBにハメられていた ————— 60
- ロシア下院支配へ ————— 64
- 天然ガス世界最大手、ガスプロムを支配 ————— 66
- プーチン以前、完全崩壊していたロシア経済 ————— 72
- デフォルトを行った一九九八年、ロシア経済は転換点に ————— 76
- プーチンとロシア経済に吹いた原油高騰の「神風」 ————— 78
- プーチン、二つの経済革命を断行 ————— 82
- 大幅減税で、巨大な「ロシア地下経済」が表に ————— 83
- エリツィン時代とプーチン時代、これほどの違い ————— 86

第2章 米口新冷戦

- プーチンはいかにアメリカを没落させたのか? ————— 91
- プーチンのアメリカ嫌い ————— 92
- ソ連時代の徹底した反米教育 ————— 93
- 冷戦の敗北 ————— 96
- アメリカが破産しない理由 ————— 98

- 基軸通貨「ドル」のさまざまな特権 102
- 米ソ冷戦後の欧州の反逆 108
- フセインの核爆弾 110
- 外交における理想主義と現実主義 113
- アフガン戦争とブーチン外交 116
- 米・ブッシュとロシア・ブーチンの短い蜜月 118
- イラク戦争と石油 120
- ブーチン、反米にシフト 122
- アメリカ没落の始まりとなった、ロシア「ユコス事件」 123
- ホドルコフスキーが犯した五つの大罪 127
- ブーチン、ついに世界の支配者に宣戦布告 133
- 石油はつねに戦争と結びついている 138
- アメリカの「石油枯渇」が近づいている? 139
- アメリカは、資源の大宝庫、カスピ海を狙う 141
- グルジアのバラ革命はなぜ起こったか 145
- バラ革命はアメリカの革命だった 147
- ブーチン、二期目の大統領選で圧勝 152
- ウクライナでオレンジ革命が成功 154
- キルギスでもチューリップ革命が成功 157
- チューリップ革命もアメリカの革命だった 159
- アメリカの革命、ウズベキスタンでの失敗 161

第3章 休戦

米口はなぜ和解したのか？

- なぜアメリカ画策の「カラー革命」は止まったのか？ 164
- プーチン、アメリカとの「血戦」を選択 169
- プーチン、仮想敵国・中国との同盟を決意 170
- ロシアと中国、「上海協力機構」を反米の砦化 177
- プーチンの逆襲にいらだつアメリカ 180
- 二〇〇六年、プーチン、ドル崩壊への歴史的決断 185
- 崩壊してゆくドル体制 188
- プーチンの引退とメドヴェージェエフの登場 191
- この章を読まれる前に 196
- ルーズベルトにハメられて、負けいくさに突入した日本 197
- 二〇〇八年に起きたロシア・グルジア戦争の真相 201
- 欧米のプロパガンダにだまされる「平和ボケ」の日本人 203
- ロシアとの戦争で得るものがなかったグルジア 207
- 二〇〇八年九月、世界的経済危機の始まり 210
- リーマン・ショック後、「アメリカ極世界」はついに終焉した 211

- オバマ大統領誕生の意味 ————— 215
- 「極世界から多極世界へ」 ————— 216
- アメリカ、自身の没落を認める ————— 218
- 中国、「世界共通通貨」導入を提案 ————— 220
- 浮上する中国 ————— 224
- プーチン、「想定内」の危機と「想定外」の危機 ————— 230
- オバマとメドベージェフによる、米ロ関係「再起動」 ————— 234
- 米ロ「再起動」のさらなる進展 ————— 238
- メドベージェフ、アメリカ訪問で一定の外交成果 ————— 243
- 悪化する米中関係 ————— 246
- 暴走中国のレアアース・ショック、世界に走る ————— 249
- プーチンとメドベージェフの危うい確執 ————— 250
- 欧米のほんとうの怖さを知らないメドベージェフ ————— 255
- 「神」、プーチンの帰還 ————— 259

第4章 最終決戦

プーチンはどうやってアメリカに「どごめを刺す」のか? ————— 263

● いまどいつ時代 ————— 264

- 世界の歴史は「覇権争奪戦」である ————— 265
- 「現実主義」から見る米中関係の今後 ————— 268
- ルーズベルトの影を追うオバマ ————— 273
- リビアの次に、アメリカはシリアを狙う? ————— 278
- イラン攻撃の真因は、「核兵器開発」ではない ————— 280
- 対イラン戦争は、アメリカの国益に完璧に合致している ————— 286
- プーチンは、メドベージェフの「米英追随外交」を転換する ————— 291
- イラン戦争が起これば、ロシアにも利益がある ————— 295
- 反プーチン・デモの黒幕は、アメリカか? ————— 297
- いまのロシア国民の不満とは? ————— 299
- アメリカ国務省とロシア国民の関係 ————— 303
- これから、プーチンはなにをめざすのか ————— 306
- プーチンは、ついにアメリカにとどめを刺す ————— 310
- 近い将来、ドル暴落とインフレがアメリカを襲う ————— 319
- エネルギー革命が起これば、アメリカ復活も ————— 323

おわりに

328

年表—プーチンとロシアと世界の動き

337

はじめに

「あの男が帰ってきた！」

いままで世界を牛耳^{ぎやうじ}ってきたアメリカの支配者たちは、恐れおののいています。

一九九〇年代、彼らは「この世の春」を謳^{おう}歌^かしていました。

一九九一年一二月、ソ連崩壊。一番の宿敵は、一五の国に分裂してしまいました。経済のライバル日本。

一九八〇年代、世界最強だった日本経済。ところが、一九九〇年代初めにバブル崩壊。「暗黒の二〇年」に突入していきます。

欧州。

欧州では、ソ連崩壊後、豊かな西欧が貧しい旧共産圏の東欧を救済するはめになり、苦しい状況。中国は、まだ弱小国家で問題にならない。

ただ一国、アメリカだけは、「IT革命」による空前の好景気にわいていたのです。

かつてバブル時代の日本人がそうであったように、アメリカ国民も、「この繁栄は永久に続く！」と確信していたのでした。

しかし……。

ソ連崩壊から二〇年。

ITバブル崩壊から一〇年。

世界は、なんと変わってしまったことか……。

二〇〇七年のサブプライム問題、二〇〇八年のリーマン・ショック、それに続く「二〇〇年に一度の大不況」。もはや世界の誰もが、ソ連崩壊後始まった「アメリカ一極時代」が終わったことを知っています。

問題は、「終わったのか？ 終わってないのか？」ではありません。

「なぜ終わったのか？」です。

普通の人たちは、こう答えるでしょう。

「そりゃああんた、アメリカが自滅したんだよ。だって、『二〇〇年に一度の大不況』の理由はアメリカの『住宅バブル崩壊』『サブプライム問題』『リーマン・ショック』などだといわれてるじゃないか？」

確かにそのとおりです。

しかし、裏の歴史を知る人たちは、こういうでしょう。

「それもそうだけど、アメリカは没落させられたんだよ」

「……………誰に????」

「あの男にやられたんだ！」

「……………あの男????」

「ブーチンさ！」

いま、あなたの脳裏にどんな言葉が浮かんだか、あててみましょう。

「これは『トンデモ系』の本?」「変な『陰謀論系』?」

どうですか。ピタリとあたりましたか?

しかし、もう少しお待ちください。

ここで本書を読むのをやめたら、あなたは「世界の真実」を知りそこねます。

確かに、「プーチンが一人でアメリカを没落させた」というのは大げさかもしれませんが。

では、こんなふうを考えてみましょう。

あなたは、「アメリカ独立」と聞いて、誰を思い浮かべますか?

そう、初代大統領の、ジョージ・ワシントンでしょう?

ほかには?

「アメリカ通」の人なら何人も名前をあげると思いますが、一般の人はワシントンくらいしか思い浮かばないでしょう。

では、「ロシア革命」と聞いて、誰を思い浮かべますか?

レーニンでは?

でもほかには?

ロシア通なら、いろいろあげるでしょうが、普通はレーニンで終わりです。

「中国共産革命」と聞いて思い出すのは?

毛沢東。

では、私たちの祖国で起こった「明治維新」はどうでしょうか?

これは、いろいろ出てきそうです。

坂本龍馬、中岡慎太郎、西郷隆盛、大久保利通、高杉晋作、木戸孝允等々。

それでも、「中心的人物」といえば、一〇人くらいしか思い浮かばないでしょう。

私がいいたいのはこのことです。

「プーチンが一人でアメリカを没落させたとはいわないが、彼は中心的な役割をはたしたのだ」と。(誤解のないように強調しておきますが、私は、プーチンが「偉い」とか「英雄」だとかいうつもりは全然ありません。私は、親米でも親口でもなく、日本を愛する一国民です。ただ、「プーチンがアメリカ没落に大きな役割をはたした」という「事実」のみを正確に伝えたいだけです)

アメリカが没落したことは、みんな知っています。

しかし、その理由について、「住宅バブルがはじけて、サブプライム問題が起こって、リーマン・ショックなどが起こって」というのは、要するに「アメリカ政府がバカだった」といつているのですよね？

その一方で、日本の政治家の多くは、いまだに「アメリカはすごい！ アメリカを見習え！ 見習え！」と主張しています。

「アメリカ政府が愚かで自滅した」というなら、そんな国からいったいなにを学べというのでしょうか？

「いやいや、実をいうとアメリカは優秀なのだ」

私もそう思います。だから、「アメリカが愚かで自滅した」ことを信じません。

そういう側面も確かにあったでしょうが、別の理由もあったのです。

アメリカは「ある勢力」から攻撃を受けて、「没落させられた」。

「ある勢力」とは、一般的な言葉ではありませんが、「多極主義陣営」とよばれる国々です。

この、いわゆる「多極主義運動」は、もともとドイツ、フランスから始まりました。

詳細は本文で書きますが、西欧の国々は、東の脅威・ソ連が消滅したのを機に、「アメリカから覇権を取り戻そう」と考えたのです。

二〇〇二年から二〇〇三年初めにかけて、アメリカは「イラク戦争」を画策し、ドイツ、フランスは、戦争に反対しました。

イラクに石油利権をもつ中国、そしてプーチン率いるロシアも反対。

国連安保理(国際連合安全保障理事会)で拒否権をもつ常任理事国のうち、アメリカとイギリスはイラク戦争に「賛成」。フランス、中国、ロシアは「反対」となりました。

結局、アメリカは国連安保理を無視してイラク戦争を開始。

アメリカを江戸幕府にたとえるならば、独仏を中心とする「倒幕運動」はこれで沈静化したかに見えました。

しかし、戦いは第二章に移っていきます。

アフガニスタン、イラクを攻撃し、イケイケのブッシュ・アメリカ。

同国は、次に「ロシアの石油利権を支配しよう」と考えたのです。

具体的には、当時ロシアの石油最大手だったユコスを買収する。

ところが、プーチンはロシアの最高検察庁にユコス社長、ホドルコフスキー逮捕を命じ、「アメ

リカにロシアの石油利権は渡さない」という強い決意を見せたのです。

激怒したアメリカは、ロシアの影響圏にある旧ソ連諸国で次々と革命を起こし、「親米反ロ」の傀儡政権を樹立していきます。

プーチンは、この動きに激怒。

仮想敵No.2、中国と同盟することで、本格的に「アメリカ幕府打倒」に動き始めます。

米ロの対立はますます激化し、二〇〇八年夏には、アメリカの傀儡国グルジアとロシアの戦争にまで広がっていました。

しかし、戦いはここまで。

二〇〇八年九月にリーマン・ショックが起こり、世界は大不況に突入していきます。

アメリカに、ロシアと戦っている余裕はなくなりました。

ロシアでは二期つとめたプーチンが大統領職を去り、「アメリカ大好き!」「ツイッター、ブログ大好き!」のメドベージェフが後を継ぎます(グルジア戦争が起こったとき、すでにメドベージェフが大統領だった)。

アメリカでは、好戦的なブッシュが去り、「平和」を叫ぶオバマが大統領になりました。

アメリカとロシアにつかの間の平和が訪れます。

両国は新たな関係を、「米ロ関係『再起動』」とよび、和解を世界にアピールしました。

ここまでザツクリ流れを見てきましたが、まだあなたは「プーチンって、ただの独裁者じゃないの、信じられなくない」などと考えているかもしれません。

私も「信じてください」とはいいません。

信じなくても、読み進めていくうちに、否定できなくなってくることでしょう。

なぜなら、私には証拠が山のようにあるからです。

本文の内容について触れておきましょう。

第1章では、無名の男プーチンが、いかにしてロシアの絶対権力者になっていったかを書きます。第2章では、「米ロ新冷戦」の真実について、詳細に書いていきます。ここであなたは、驚くべき歴史の真実を知ることになるでしょう。

第3章では、米ロが和解した理由について。ここであなたは、「アメリカの悲惨な現状」を知ることになります。

第4章では、大統領に返り咲いたプーチンが、ロシアと世界をどこに導いていきたいのかに触れます。

また、本文のなかで、しばしば「日本とロシアの違い」「ロシア支配層の考え方」などについて触れます。

なぜかというと、平和に慣れた日本人と、戦国時代に生きるロシア人では、あまりにも思考法、発想法がちがうからです。

さらに、「平和ボケ」した日本の政治家と、戦国時代に生きるロシアのリーダーでは全然考え方がちがいます。

私は、二〇年以上モスクワに住み、この目で「ソ連崩壊」とその後の「地獄」、そして「復活」

を見てきました。

ですから、あなたに、ロシアで起こったこと、そしてプーチンが引き起こしたことの詳細を伝えることができるでしょう。

この本を読み終えたとき、あなたの世界観は一変しているはずです。

第1章 神への道

プーチンはいかにして
ロシアの絶対権力者になったのか？



スパイを夢見た少年

これから私たちは、プーチンがしでかしたことについて学んでいくわけですが、やはり最初に、彼の生い立ちを知っておく必要があるでしょう。

フルネームは、ウラジーミル・ウラジーミロヴィッチ・プーチン。

プーチンは一九五二年一〇月七日、レニングラード（現サンクトペテルブルク）で生まれました。

お父さんは、ウラジーミル。お母さんは、マリア。

父ウラジーミルは、第二次世界大戦時、カークレーベ KGB（ソ連国家保安委員会）の前身であるNKVD（内務人民委員部）で働いていました。戦後は、機械技師として鉄道車両を生産する工場に勤務しています。

母マリアは、清掃員や食料品店の店員など、いくつも仕事を替えていたそうです。

プーチン家は、裕福でない、ごくごく普通の家庭だったようです。

ちなみに父のウラジーミルは、プーチンが首相になった一九九九年に、母のマリアは一九九八年に亡くなっています。二人とも、プーチンが絶対権力者になるのを見届けられなかったのです。

両親も、まさか「自分たちの息子がロシアの神になる」とは考えていなかったでしょう。

プーチンは、エリート校ではなく、近所の普通の学校に通っていました。

記憶力がよく頭はいいものの、いたずらばかりしていたそうです。

しかし、小学六年生ごろから柔道を習うようになり、次第にまじめになっていきました。

さてプーチン少年は、あるときから夢を描くようになります。少年のピュアな夢、それは……。

「スパイになること！」

「そんな変な夢もつな！」と突っ込みたくなりますが、なんでもスパイが活躍する小説や映画を見て、「なりたい！」と思ったのだとか。いろいろなロシア人に聞いてみると、ソ連時代は「スパイ諜報員」にあこがれる子供が多かったそうです。なぜかというところ、テレビドラマや映画で、諜報員は「スーパーヒーロー」として描かれていた。

イギリスの「007」と同じです。

まあ、それだけなら、ジャッキー・チェンの映画を見て、「僕も拳法の達人になりたい！」と考える、ごく普通の少年のレベル。



少年時代のプーチン

ところが、プーチンのちがうところは、その夢をずっつと抱き続けていたこと。

一四歳のとき、彼はKGBの支部に行き、職員に質問します。

「KGBのおじちゃん！ 僕、諜報員になりたいんだけど、どうすればKGBに入れるか教えてくれる？」

すると、KGB職員は、「大学は法学部がいい」「言動的、思想的問題を起こさない」「スポーツで実績のあるやつは、

KGBに入りやすい」ことなどを教えてくれました。

言動的問題とは、たとえば「ソ連政府を批判する」こと。思想的問題とは、たとえば「宗教にはまる」とか「資本主義思想にはまる」など。

で、プーチン少年はこのアドバイスを聞いて、どうしたと思います？

なんと、KGBのおじさんのアドバイスどおり、名門レニングラード大学の「法学部」に合格。柔道に打ち込み、きわめてまじめな学生になっていったのです。

「これもすべてKGBに入ってスパイになるため」

なんだか冗談のようですが、ほんとうの話。

一九七五年、大学四年生のプーチンは、KGBからスカウトされます。

こうして彼は、少年のころの純粹な夢を「九年越し」でかなえたのでした。

諜報員として冷戦の最前線へ

その後プーチンは、KGBのレニングラード支部事務局に勤務。さらに、対諜報活動局を経て、対外諜報部に配属されます。

そして一九八五年、三三歳のとき、ソ連の實質支配下にあった東ドイツ(当時)のドレスデンに派遣されました。現地で政治関係の諜報活動を行うためです。ついに念願の「スパイ」になったのです。

さて一九八五年といえば、あのゴルバチョフがソ連書記長に就任し、「ペレストロイカ」(再建)政策を開始した年。



(写真左)制服を着たKGB時代のプーチン。(写真右)1985年、プーチン33歳のとき、東ドイツ派遣前に。左から、父ウラジーミル、母マリアと

そんなとき、プーチンは、冷戦の「最前線」、東ドイツに派遣されたわけです。

ここでいう「最前線」の意味とは？

当時ドイツは、アメリカを中心とする資本主義陣営の西ドイツ、ソ連を中心とする共産主義陣営の東ドイツに分かれていた。そして、ベルリンの壁が西と東を分断していた。この壁は、まさに西側と東側、資本主義と共産主義を分ける境界線だったのですね。

プーチンはここで、「祖国ソ連の敗北」を目撃することになります。

ものわがりのいいゴルバチョフは、アメリカに譲歩を重ねていった。

そして、東欧で次々と民主革命が起こるのを阻止しなかった。

その結果、一九八九年十一月、ベルリンの壁は崩壊。東欧の国々はドミノ式にソ連圏を離脱していきます。

これを、KGBのスパイ、プーチンは、なすすべもなく見ていました。

一九九〇年一〇月、東西ドイツ統一。

三八歳のプーチンは、古巣のレニングラードによび戻されます。

ゴルバチョフ時代のソ連とは

さて、プーチンがレニングラードに戻ってきたとき、祖国ソ連はどうなっていたのでしょうか？
個人的な話ですが、私は一九九〇年九月、つまりプーチンが戻る一ヶ月前に、ロシア外務省付属モスクワ国際関係大学に留学するため、モスクワにやってきました。

正直、カルチャーショックでした。

超大国ソ連の首都モスクワの玄関口シエレメチエボ空港に降り立った。しかし、照明が異常に暗い……。

しかも軍人が、空港内のあちこちに立っている。戦争でもおっぱじめるつもりなのか？ モスクワ市内に向かうバスに乗っても、車内の電灯は白ではなく、オレンジ色で暗い……。

もっとも奇妙に思ったのは、バスのなかで笑っている人が全然いない。というか、そもそも会話をしていない。

モスクワは首都だというのに、自動車の数がほんとうに少ない。道路が一日中スカスカなのです。年配の人たちは覚えていると思いますが、名物は店の行列。食料品店に入るのに、二時間並ばなきゃいけない。ようやく入れてもなかはガラガラで、ほとんど買うべきものがない。もっともひどいときは、店からトイレトペーパーがなくなった。

私はしかたなく、ロシアの店にくらべ、べらぼうに高い外貨ショップで買ったのですが、一般人は「新聞紙を使った」なんて話もありました。

「あのスレンダーなロシア美女が、新聞紙でおしりを……」
なんて想像すると、妙な気分になります。

私は、留学してしばらく、大学の寮に住んでいました。

しかし、「せっかくロシアに来たのだから、一般人の生活を知るべきだ」と思い、一九九二年からホームステイを始めました。

もう、びっくりしました。

まず、洗濯機がない。

その家が特別貧乏だったわけではなく、洗濯機がないのは、ソ連の一般家庭ではごくごく普通のことだったのです。

私もホームステイ時代、洗濯物は手洗いしていました。

テレビはソ連製の白黒。自動車なんてもちろんない。

物がすべてではありませんが、「計画経済は、ダメだ！」と確信したのも事実です。

三〇代後半から驚異のスピード出世

「ソ連が崩壊してなにが起こったか？」は後で詳しくお話しすると、プーチンのその後を見てみましょう。

一九九〇年、三八歳のとき、レニングラードに戻ったプ



ソ連初代大統領ミハイル・ゴルバチョフ
(任期:1990-1991/1931-)

ーチンは、なんとKGBに辞表を提出します。

しかしここから、プーチンの驚くべき運命が展開していくことになります。

一九九一年六月、大学時代の恩師サブチャークがレニングラード市長に当選。

プーチンはこのサブチャークにより、市の対外関係委員会議長に任命されました(プーチン、三八歳)。同委員会の主な役割は、市に外国投資をよび込むこと。

さらにその一年後の一九九二年には、(レニングラード市改め)サンクトペテルブルク市・副市長に就任(四〇歳)。一九九四年には、第一副市長に昇進します(四二歳)。

ところで、この「副市長」と「第一副市長」とのちがいでありますが、副市長は何人もいて、「第一副市長」が一番偉いのです。

しかし、その後一九九六年の市長選挙で、プーチンの上司サブチャークは敗北。プーチンは、新市長のヤコブレフから、引き続き市で働いてほしいと依頼されましたが拒否。潔く、第一副市長を辞職しました(四四歳)。

しかし、失業したプーチンに、今度はモスクワから声がかかります。

それも、なんとロシア連邦の大統領府から!

プーチンは、ロシア大統領府総務局次長に任命され、モスクワに引っ越します。そして翌一九九七年三月には、大統領府副長官に、一九九八年五月には第一副長官に昇進(四五歳)。

まさに驚異のスピード出世です。

さらに、一九九八年七月には、ソ連KGBの後身であるFSB(ロシア連邦保安庁)の長官に任命

されます。

「スパイになりたい」とあこがれていた少年。東ドイツで諜報員として活躍した青年。

いつの間にか出世し、ついにロシアの全諜報員のトップに立ったのです。

このとき、プーチン、四五歳。

「バウチャー」という紙切れが生んだ、すさまじい格差社会

さて、プーチンは一九九八年にFSB長官になった。そして、翌一九九九年八月(四六歳)には、もうロシア連邦政府の首相に任命されています。

なんぼなんでも、「出世早すぎー!」ではないですか？

その理由を知るために、ロシアでソ連崩壊後に起こったことを知っておく必要があります。

ソ連が崩壊したのは、一九九一年一二月。

ソ連が崩壊したとき、(あたりまえですが)ロシア経済はボロボロ。国は膨大な財政赤字を抱えていました。新生ロシアの初代大統領エリツィンは、国家財政と経済を立て直すために、IMF(国際通貨基金)から約226億ドルを借りました。

エリツィン大統領のもとで、ガイダル首相代行、チュバイス副首相を中心に、大規模な改革が実施されます。

さて、この二人はどうやって政策を決定したのでしょうか？

これは、IMFの勧告に従ったのです。



新生ロシア初代大統領エリツ
イン(任期:1991-1999/19
31-2007)

IMFは「金を貸すからいいこと聞け！」です。
金を貸しても、大統領と取り巻きが豪遊してパツパと散財さ
れたらたまりませんから、IMFの気持ちもわかります。

IMFの要求の一つに、「大規模な民営化をすべし！」とい
うのがあった。それで、ガイドルとチュバイスは「民営化」す
ることにした。

しかし、大きな問題がありました。

共産主義国家には、そもそも「私有財産」がない。よって、ソ連には「民営企業」がなかった。
全部、国営企業。ということは、ソ連時代のロシア人はみな「公務員」。だから「民営化」しよ
うって困ってしまう。

公務員に、国有資産を買い取るお金がありますか？

あるわけがない。

で、改革を主導した二人は、「バウチャー方式」というものを採用したのです。

一般的に「バウチャー」とは引き換え券の意味ですが、この場合は「民営化証券」と訳されます。
政府は、全国民に一定額のバウチャーを無料で配る。

国民は、これを民営化された企業の株式と交換できるのです。

ところが、大部分のロシア人は、「民営化証券」とか「株」とかいわれてもわけがわからなかつ
た。たとえば、資本主義国家に住む日本人が、「国民全員公務員」といわれてもイメージできませ



ソ連崩壊後、国営企業民営化のために全国民に支給されたバウチャー(民営化証券)

んね？

同じように、当時のロシア国民は、「バウチャー」の意味と使い方が理解できず、「ただの無価値な紙切れ」と考えたのです。

しかし、全員が全員「無知」だったわけじゃありません。

なかには、バウチャーが「大富豪へのエクस्प्रेस切符」であることを悟った人々もいた。

バウチャーは売買が自由だったので、「悟り」を開いた人たちは、価値を理解できない大部分のロシア人たちから、超安値で買いあさっていきます。

たとえば、ある人は、トラックにロシア人の大好きなウオッカを大量に積み、田舎に行く。そして純粋な村人たちに、「ウオッカ一本とあなたのバウチャーを交換してあげますよ！」とすりよる。すると、村人たちは「おお、このわけのわからない紙切れで、ウオッカがもらえるのか！」と、喜んで交換に応じてしまったのです。

こうしてソ連崩壊後、「労働者の天国」「万民平等」のロシアに、あつという間に「格差社会」が訪れてしまいました。

さて、ガイダル、チュバイス改革の評判は(あたりまえですが)非常に悪く、二人は一九九二年末、エリツィンにより解任されます。そしてエリツィンは、世界最大の天然ガス会社ガスプロム社長、チエルノムイルジンを首相に任命しました(ガスプロムについては後述)。



「バウチャー」による急速な民営化を進めたガイダル首相代行(左)とチュバイス副首相(中)。その後、首相したチェルノムイルジン(右)(すべて当時)

しかし、すでに始まってしまった民営化プロセスは、止まらなかつたのです。

一九九五年末から、民営化は第二段階を迎えます。

ロシアは、一九九二年以降も急激なGDP(国内総生産)の減少と、目玉が飛び出るほどのインフレで苦しんでいました。

当然、国庫は空。

そんなとき、民営化によって出現した「銀行家」たちが、政府に「お金、貸してあげましょうか？」と提案してきます。

金のない政府は、喜びました。

しかし、銀行家たちはいいます。

「私たちにもリスクがあります。つきましては国有資産を担保にしてください」

どういふことかという、銀行が国に金を貸して政府が返済できない場合、銀行は国有資産を受け取ることができる。

さくつと書いていますが、これは非常に重要です。

なぜかという、石油や鉄鋼などロシアのドル箱部門が、これです。民間に移ってしまったから。

たとえば、のちにプーチンと対決することになるユダヤ系ロシア人ホドルコフスキーのメナテツ

プ銀行は、この手法で石油会社ユコスを約三〇〇億円で取得した。

彼は、この会社の価値を二〇〇三年、時価総額三兆円まで増やしました。

こうして、ロシアの金融と資源を支配する「新興財閥軍団」、つまり超成金軍団が誕生したのです。

ユダヤ系新興財閥(成金軍団)が台頭し、ロシア経済を支配

その後もロシアでは、ありえないほどの格差を生みながら、民営化が進んでいきました。

ソ連崩壊から約五年後、一九九七年一月の時点で、民営企業はロシア全体の七五%、労働人口の八〇%まで増加。そして、富の集中と格差も加速していきます。

当時、もつとも影響力があり、「クレムリンのゴッドファーザー」とよばれたベレゾフスキーは、なんと「七人の新興財閥がロシアの富の五〇%を支配している」と公言していました。

七人の新興財閥とは、

- 1 ボリス・ベレゾフスキー(石油大手・シブネフチ、ロシア公共テレビ・オーエルテORT等)
- 2 ロマン・アブラモビッチ(石油大手・シブネフチ)
- 3 ピョートル・アヴェン(ロシア最大の民間商業銀行最大手・アルファ銀行)
- 4 ミハイル・フリードマン(石油大手・ティエヌケーTNK)
- 5 ウラジーミル・グシンスキー(持ち株会社・メディア・モスト、および傘下の民放最大手・エヌティーヴエーNTV)
- 6 ミハイル・ホドルコフスキー(メナテップ銀行、石油大手・ユコス)
- 7 ウラジーミル・ポターニン(持ち株投資会社・インターロス・グループ、ニツケル・パラジ)

ウム生産世界最大手・ノリリスク・ニツケル)

(基盤は当時のもの)

7のポターニン以外は、すべてユダヤ系。

なかでももつとも政治力をもっていたのは、1のベレゾフスキーでした。なぜかというところ、彼は当時の大統領エリツイン一家と癒着していったから。

一方で、反エリツインの新興財閥もいました。そのリーダーは、5のメディアア王グシンスキー。

一九九八年、ベレゾフスキーと新興財閥軍団は焦っていました。

エリツインは心臓を患^{かか}っていて、いつ死んでもおかしくない状態だった。

ベレゾフスキーの願いは、エリツインの後に、自分の「傀儡大統領」を立てること。そして、彼は試行錯誤の末、プーチンを「次の大統領」に選びました。

それが、「プーチン、超スピード出世」の秘密だったのです。

「クレムリンのゴツドファーザー」、ベレゾフスキーとは

新興財閥の帝王、ボリス・ベレゾフスキーは、一九四六年、モスクワに生まれました。

モスクワ林業技術大学を卒業。応用数学博士。

彼は、まだソ連時代だった一九八〇年代、「ジーンズ」の生産と販売からビジネスを始めたそうです。

「……ジーンズから」

ロシアの富の50%を支配したといわれる 新興財閥7人と、その経済的基盤



驚きです。全然ゴッドファーザーらしくない。

しかし、当時ソ連には、まともなジーンズがなかったのです。鎖国状態だったので、西側からも入ってこなかった。

資金を貯めた彼は一九八九年、自動車販売会社「ロゴバス」を設立。ロシアの自動車最大手「アフトバス」の製品を販売しました。ソ連が崩壊した一九九一年、ロゴバスは、独メルセデス・ベントツの公認ディーラーになります。

一九九五年一月、国営放送局「ソ連中央テレビ1チャンネル」を基盤に、「ロシア公共テレビ（ORT）」がつくられます。ベレゾフスキーは同局の取締役になりました。

同年、民放テレビ局「^{テレビ}TV6」を買収。ベレゾフスキーはその後、さまざまなメディアを支配下におさめていきました。

彼が所有していたメディアの例をあげると、ロシアの「日経」とよばれた日刊紙「コメルサント」「独立新聞」「ノーヴィエ・イズベスチヤ（新しいニュース）」、週刊誌「ヴラスティ（権力）」「デエンギ（貨幣）」「オガニヨク（閃光）」等。ラジオ局「ナツシエ・ラジオ（われらのラジオ）」。

一九九六年、大手石油会社「シブネフチ」を買収（シブネフチは一九九五年、国有企業として設立されたが、一九九七年には早くも民営化されている）。

そのほかの経済基盤として、「統一銀行」「アフトバス銀行」など。

彼が決定的に浮上したのは、一九九六年のことでした。

この年の六月には「大統領選挙」があった。一九九六年初めの時点では、「エリツィンの再選は

ない」と誰もが確信していました。国民の生活は、エリツインの経済改革の失敗でどん底に落とされてきたからです。

ロシア人は、数年前「自由と民主主義の到来」に歓喜したことをすっかり忘れ、エリツインと側近たちを憎悪していました。

当時の支持率を見ると、

- 1位 ジュガーノフ(共産党)……二四%
- 2位 ヤブリンスキー(ヤブロコ)……一一%
- 3位 ジリノフスキー(自民党)……七%
- 4位 レベジ(無所属)……六%
- 5位 エリツイン……五%

共産党のジュガーノフは、現職のエリツインに約五倍の差をつけ断トツ。

エリツインが半年で盛り返すのは「無理だろう」とすべての人が思っていたのです。

ジュガーノフが勝つと、一番困るのは新興財閥軍団です。

共産党の新大統領は、新興財閥軍団の会社を、旧ソ連当時のように、全部「再国有化」してしまうことでしょう。そんなことになったら、いままでの苦勞が水の泡……。

ベレゾフスキーは一九九六年の二月、「新興財閥軍団の力を結集し、エリツインを再選させよう」と決意します。



ロシア共産党党首ゲンナジー・ジュガーノフ(1944-)

そして、ライバル関係にあったメディア王グシンスキーをはじめ、ほとんどの新興財閥を説得。ベレゾフスキーがもつ「ロシア公共テレビ」とグシンスキーがもつ民放最大手テレビ局「NTV」は、「ジュガーノフが大統領になれば、また恐怖のソ連時代が戻ってくる」と、徹底的に国民を洗脳していきます。そして、エリツインの支持率は奇跡的に回復していったのです。恐るべし、「メディア洗脳」。

一九九六年六月一六日の選挙で、エリツインは三五%で一位、ジュガーノフは三二%で二位。どの候補も五〇%に達しなかったため、同年七月三日、決選投票が行われました。

結果は、エリツインが五三・八%で見事再選。これで、ベレゾフスキーや新興財閥の政治力、発言力は増しました。

その「ごほうび」というのでしょうか、ベレゾフスキーは一九九六年一〇月、エリツインから、ロシア安全保障会議副書記に任命されます。

さらに、一九九八年四月にはCIS(独立国家共同体)執行書記という重要ポストにつきましました。そんな彼が、プーチンを支援した。

FSB長官プーチン、ベレゾフスキーに接近

プーチンは、「ベレゾフスキーに選ばれて大統領になった」。

それはわかりましたが、「なんでプーチンが選ばれたの?」ということも重要ですね。

実は、ベレゾフスキーが焦っていたのは、エリツインの病気だけが理由ではありませんでした。強力なライバルが出現していたのです。



ロシア・金融危機を引き起こし、エリツィンに解任されたキリエンコ首相(任期:1998.4-1998.8)(左)と、後任のプリマコフ首相(任期:1998.9-1999.5)(右)

ロシア経済は、その後もますます悪化し続けていきました。

そして、一九九八年八月、若きキリエンコ首相率いるロシア政府は「デフォルト」を宣言。いわゆる「ロシア金融危機」が起こります。

これで、当時首相だったキリエンコはクビになり、プリマコフが首相になりました。

このプリマコフ。彼はKGBの大物で、プーチンの大先輩なのです。

新生ロシアになってからは、ロシア対外情報庁初代長官。一九九六年一月からは外務大臣をつとめ、国民から高い支持を得ていました。

そして、なによりもプリマコフは、「新興財閥」が大嫌いだった。

なぜ、「新興財閥」のバックアップで大統領に再選されたエリツィンが、「新興財閥嫌い」を首相に選んだのでしょうか？

これは、下院第一党の共産党が、「プリマコフ以外の首相は承認しない！」と強硬に主張したからです。

プリマコフは、スクラトフという検事総長とともに、ベレゾフスキーを追い込んでいきます。

ベレゾフスキーだって、さんざん悪いことをしてのしあがってきた。だから、「FSB」とか「検事総長」とかが出てくる困ってしまうのです。

一九九九年二月、ベレゾフスキーは、プリマコフ、スクラトフに追いつめられ、窮地に陥っていました。

人間、権力とお金があるときは、人がうじゃうじゃ寄ってきます。しかし、同じ人がやばい境遇に立たされると、「ス〜ツ」と周りから人が消えていく。

ベレゾフスキーも、当時そんな状況にいました。

このときプーチンは、すでにFSB長官の地位にありました。

さて、一九九九年、二月二日はベレゾフスキーの妻レーナの誕生日。

ここ数年間は、大富豪らしく大々的なパーティーをしていた。しかし、この年は、家族と親しい友人だけで「地味に祝おう」ということになっていました。大々的に祝おうとしても、そもそも人が集まらない。それで、地味なパーティーが始まったのです。

そこに、意外な人物がやってきます。

招待されていない客、「FSB長官」のプーチンでした。

ベレゾフスキーは驚きました。

日本でもロシアでも、「苦しいときの友は真の友」です。

みんなが離れていくなか、プーチンは近づいてきた。

「こいつは信用できる！」

ベレゾフスキーは、そう確信します。

このときの様子を、イギリスで二〇〇六年に殺されたFSB諜報員リトビネンコの妻マリーナと、ベレゾフスキーの友人アレックス・ゴールドファーンが、本のなかで記しています。

以下引用。



ロシア新興財閥の大物で「クレムリンのゴッドファーザー」といわれた、ボリス・ベレゾフスキー(1946-)

へプーチンがレナ・ベレゾフスカヤの誕生パーティーに現れるまで、ボリス(筆者注…ベレゾフスキーの名前はプーチンときほど親しいわけではなかった。その日、ボリスは、FSB長官が二十分ほどで別荘に到着すると警備員から告げられた。最初、その場にいた者はみな、緊急事態か何か起きたのだと思った。しかし、ボリスが客人を迎えに出ると、警備員の一団が半円を描くなか、車から特大のバラの花束が、続いて若きスパイ組織のリーダーが現れた。)(『リトビネンコ暗殺』早川書房 P216)

なんか、映像が浮かんでくる感じがしますね。

黒い車から、プーチンが「ニヤリ」としながら、巨大な花束をもっておりてくる。

へボリスにとっては思いがけないことだった。

「ワロージャ(筆者注…プーチンの名前、「ウラジミール」の愛称)、私は大いに感動したよ。だが、なぜプリマコフとの関係をややこしくするようなことをするのだ?」

「どうでもいいことだ」とプーチンは言った。「私はあなたの友人だ。それを示したかった。とりわけほかの人々に。彼らはあなたを社会から除外したいと思っているが、あなたが潔白であることは私が知っている」(同前P216〜217)

どうですか、これ?

プーチンは、たった一回の訪問で、ベレゾフスキーのハートをわしづかみにしたのです。

そもそも誰の人生にも浮沈はつきもの。ただ、それが金持

ちや権力者の場合、目立つのですね。

そんなとき、普通の人は、「ああ、こいつとつきあったら損をする」と離れていきます。しかし、そのとき、以前と変わらぬ態度で接してくれる人、励ましてくれる人がいれば、堕ちた権力者は、その人のことを無条件で信用するでしょう。

もし、彼が再び権力を握ることがあれば、かなりの確率で裏切らなかつた人を引き上げます。

もちろん、将来引き上げられる、引き上げられないは別として、「立場や金の量にかかわらず、変わらぬ友人であり続けること」は大事でしょう。人間として。

ベレゾフスキーはこれで、「プーチンを次期大統領にする」ことを検討し始めます。

しばらくのち、ベレゾフスキーはプーチンに会って、こう切り出しました。

〈「ワロージャ、きみはどうだね？」ボリスが唐突に尋ねた。

「どうだねとは？」プーチンはわけがわからずに訊き返した。

「大統領になれないか？」

「私が？ とんでもない、大統領なんて柄じゃない。自分の人生でそんなことは望んでいない」

「ほう、それなら何が望みだ？ このままずっと長官を続けたいのか？」

「私は……………」プーチンは口ごもった。(同前P227～228)

みなさん、どうですか？

プーチンの望みはなんだったのでしょうか？ 続きを読む前に、ちょっと考えてみてください。

〈「大統領になれないか？」

「私が？ とんでもない、大統領なんて柄じゃない。自分の人生でそんなことは望んでいない」

「ほう、それなら何が望みだ？ このままずっと長官を続けたいのか？」

「私は………」プーチンは口ごもった。「ベレゾフスキーになりたい」(同前P227〜228)

「ベレゾフスキーになりたい」

ロシア人はなんでこういう「歯の浮くようなセリフ」をサラリというのだ！
しかし、効果は抜群だったのです。

ベレゾフスキーは、怖い顔したプーチンのことを、「かわゆいのう」と思うようになった。「この男は苦境のときにも裏切らないし、変な野心もない。傀儡大統領にピツタリだ！」と確信していたのです。

いよいよ首相の座へ

話はますます複雑になっていきます。

「ベレゾフスキーは、KGB出身の大物、プリマコフ首相と対立している」という話でした。

しかし、プリマコフは一九九九年五月、彼の人気に嫉妬しつとした大統領エリツィンに解任されてしまいます。次に指名されたステパシンも、五月に任命され、八月に解任された。

そして、ついに同八月、プーチンが首相に任命されました。

その直後の同じ八月、ロシアからの独立をめざすチェチェン共和国の武装勢力一五〇〇人が、ダ

ゲスタン共和国を攻撃。一部の村を占領するという事件が起こります。

九月二三日、新首相プーチンは「テロリスト掃討」を名目にチェチェンへの空爆を開始。第二次チェチェン戦争が始まりました。

嗚呼、どこの国民も変わりません。アメリカでは、ブッシュが湾岸戦争を始めたとき、ブッシュ子がアフガン戦争を開始したとき、いずれも高い支持を得ていました。

同じように、チェチェン攻撃を開始した強気のプーチンの支持率はどんどん上がっていきます。翌一〇月、ベレゾフスキーは「プーチンを支える」政党「統一」を立ち上げます。これも、「プーチンを大統領にするための布石」でした。

そして、一九九九年一月一九日、ロシア下院選挙(定数四五〇名)が実施されました。

一位は「共産党」。四五〇議席中、一二三議席を獲得

二位は、ベレゾフスキーとプーチンの「統一」。七三議席。

三位は、メディア王グシンスキーが支持し、プリマコフ元首相率いる「祖国・全ロシア」。六八議席。

一位がプーチンの「統一」ではなく「共産党」というのがおもしろいですね。いかにも「公正な選挙」が行われた感じがします。

同年一月三十一日、エリツィンは、「健康状態の悪化」を理由に、突然、任期満了前の引退を宣言しました。

私もこれをテレビで見ましたが、驚きました。

「エリツィンほど権力への執着が強い男はいない」といわれていたのですから。

エリツインの電撃引退で、プーチンは首相から「大統領代行」になりました。さらに、翌二〇〇〇年三月の大統領選挙で、五三%を獲得。二位、共産党のジュガーノフ(二九%)に大差をつけ圧勝します。

ついに、彼は、正式な「大統領」に就任しました。

大統領プーチン、国内統治に向けて「革命的な大改革」

プーチンが大統領選に勝利したのは二〇〇〇年三月。就任式が行われたのは同五月。

プーチンは、就任早々「革命的改革」に乗り出します。

それが、「連邦管区」^{かんく}の設置。

ロシアには「連邦構成体」とよばれるものが八九ある(現在は八三)。いってみれば、日本の都道

府県です。この国の場合、「共和国」「地方」「州」「自治州」

「自治管区」があります。

ちなみに、この「共和国」ってなんでしよう？

「共和国」には、ロシア人よりも少数民族が多く住んでいるのです。たとえば「チエチエン共和国」にはチエチエン人が多く住んでいる。「カルムイキヤ共和国」にはカルムイキヤ人が住んでいる。

さて、二〇〇〇年五月にプーチンが提案した「革命的改革」の内容とは？



2000年5月、大統領就任式典で就任宣誓を行うプーチン(左)。右は前大統領のエリツイン

1 八九の連邦構成体を七つに分け、その上に「連邦管区」を設置する(現在は八つ)
たとえば、こういうことです。

日本には都道府県がありますが、ちよつと数が多くてごちゃごちゃしてますね。だから都道府県の上に「もう一つ」、それを統括、管理する上部組織をつくりましよう。たとえば、「九州連邦管区」とか「四国連邦管区」とか。なんとなくイメージできるでしょうか？

で、中央から派遣された「大統領全権代表」が、連邦構成体を監視・監督するのです。ちなみに初代「全権代表」に任命された人たちは、なんと七人中五人が、ロシア軍の「将軍」でした。

これって「反逆したら許さないぞー」という脅しおび？

2 連邦構成体首長は、上院議員になれない

ロシアの国会には下院(二〇一二年四月六日現在、定数四五〇名)と上院(同、定数一六六名)があります。下院議員は、国民の選挙で選ばれる。上院議員はどうかというと、国民選挙ではなく、それまで「連邦構成体首長」(例、知事)が兼任していたのです。

これを、プーチンは、「知事は上院議員を兼任できない」と決めた。

3 連邦政府は、連邦法に違反した首長を解任できる権利をもつ

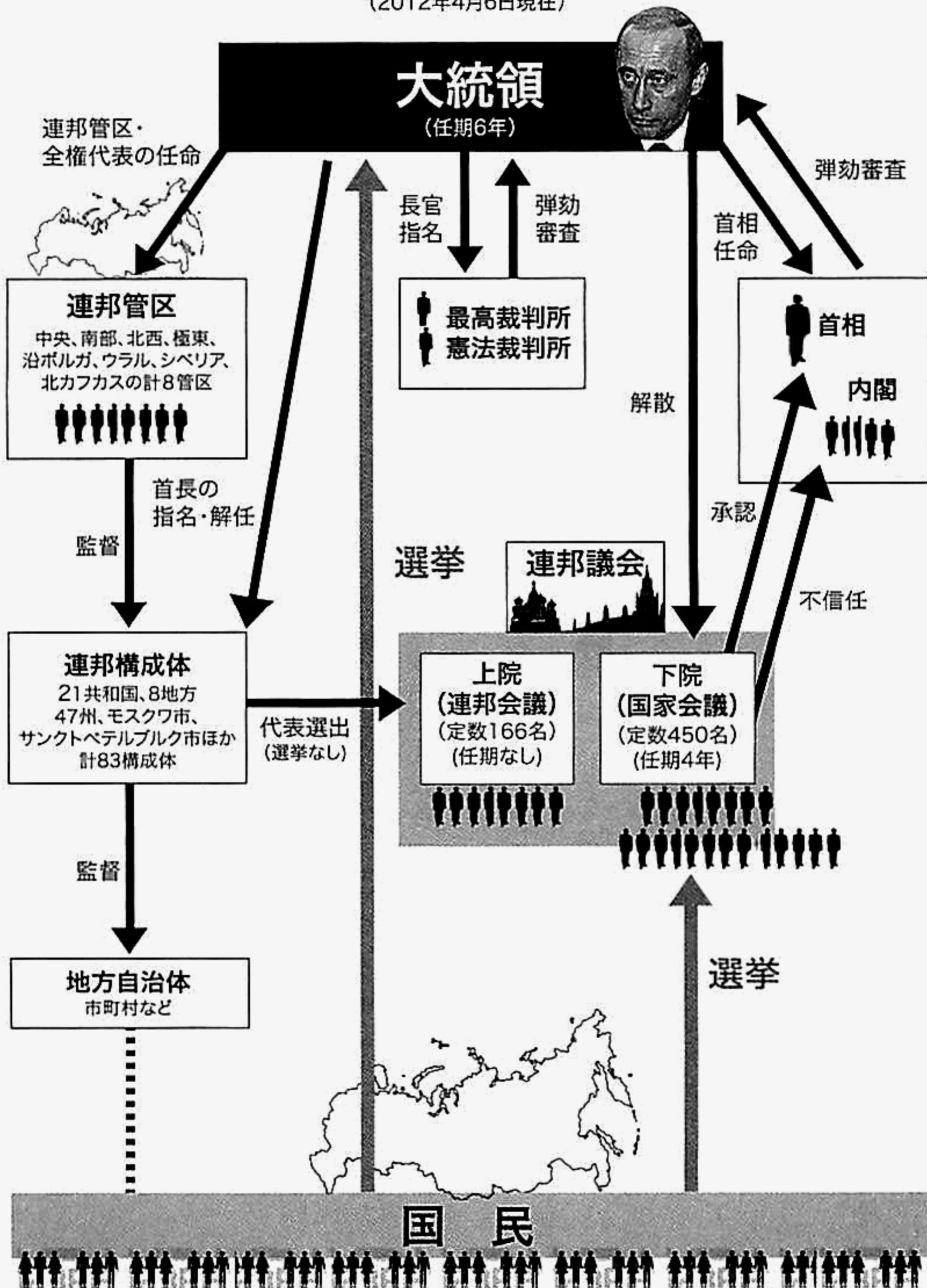
言い換えれば、大統領のプーチンは、地方の知事をクビにできると。

プーチンはなぜこのような改革をしたのでしょうか？

一九九〇年代、ロシアは政治的にも経済的にもあまりに混乱し、連邦政府の力が完全に弱まっています。連邦構成体の首長たちは、中央の目が届かないのをいいことに、「汚職の限り」をつく

これが、プーチン後のロシア政治体制だ！

(2012年4月6日現在)



していた。

それによって、彼らは強大な力をもつにいたり、「小皇帝」とまでよばれていました。繰り返しますが、プーチンは、

- 1 新たに連邦管区を創設し、その全権代表に首長たちを監視・指導させる
 - 2 首長は「上院議員」になれないようにし、影響力を削ぐ
 - 3 連邦政府が首長を解任できるようにすることで、中央に服従させる
- ことに成功しました。

これはつまり、地方の力を削ぐことで「中央集権化」を進める。そして、中央のトップには、自分がいる（上院は、連邦構成体の行政府および立法機関の代表各一名より構成されるようになった。国民選挙で選ばれるのではないのは変わりなし）。

つまり、「自分の支配力が、地方のすみずみまでおよぶようにした」のです。

新興財閥の大物、グシンスキーを排除

大統領になり、強大な権力を手にしたプーチン。いよいよ「神への道」を歩き始めます。

最初の犠牲者になったのは、一九九九年一二月の選挙で、反プーチン政党「祖国・全ロシア」を支援した新興財閥の大物、グシンスキー。

グシンスキーは一九五二年一〇月六日生まれ。既述のようにユダヤ系です。

グシンスキーは一九九〇年代、ロシア最大のメディアグループ、「メディア・モスト」を築いていました。日刊紙「セヴォードニヤ（今日）」、民放テレビ「NTV」、衛星放送「NTVプリュース」、

ラジオ局「モスクワのこだま」、週刊誌「イトーギ(総括)」「ニューズウィーク誌と提携」等々。特にNTVは、民放最大手に成長していました。

グシンスキーのメディアは、遠慮なく政権を批判。欧米から「ロシアの言論の自由の象徴」と絶賛され、グシンスキーは「ロシアのメディア王」としてその名をとどろかせていた。

彼はまた、二〇〇〇年に「世界ユダヤ人会議」の副議長にも選ばれていて、世界のユダヤ人界でもかなり影響力のある人物だったのです。

しかし、プーチンは遠慮しません。

プーチンが大統領に就任した翌月の二〇〇〇年六月、グシンスキーは、横領・詐欺などの容疑で逮捕されます。その三日後に釈放されたものの、スペインに脱出。以後、政治亡命生活を余儀なくされることとなります。

彼が育てたNTVは四月、天然ガス世界最大手ガスプロムに買収されてしまいました。

ちなみに、欧米で評判がよかったグシンスキーですから、(事実上プーチンの命令による)逮捕は、全世界のマスコミから非難されました。

アメリカのクリントン大統領(当時)も、ロシアの「言論の自由の行方を心配している」と声明を出します。

ロシア国内では、「祖国・全ロシア」「共産党」「ヤブロコ」「右派連合」、要するにプーチンの「統一」以外の



ベレゾフスキーと並び、ロシア新興財閥の大物で「ロシアのメディア王」といわれた、ウラジーミル・グシンスキー(1952-)。反プーチンの旗頭

全政党が、これを「言論弾圧」と批判。

軌を一にして、「新興財閥軍団」も検事総長に書簡を送り、検察の行動を非難しました。プーチンも最初から「絶対権力者」だったわけではないのですね。

プーチン支持だったベレゾフスキーも反プーチンへ

さて、一九九〇年代末、「ロシアは七人の新興財閥が牛耳っていた」という話をしました（P31参照）。

七人の中で、「二大巨頭をあげろ！」といわれれば、ベレゾフスキーとグシンスキーだったでしょう。

ベレゾフスキーはエリツイン一家と癒着することで、「クレムリンのゴッドファーザー」とよばれていた。そのため、欧米ではきわめて評判が悪かったのです。

一方、グシンスキーは、「反エリツイン」で評判がいい。ところが、そのグシンスキーは、プーチンが大統領に就任するやいなや、即やられた……。

宿敵がいなくなったのだから、ベレゾフスキーは喜んでいいようなものですが、心境は複雑でした。

二〇〇〇年五月、プーチンの大統領就任式が行われた。

ベレゾフスキーのサポートにより、プーチンが（エリツイン引退後）「大統領代行」になってからわずか五ヶ月。

しかし、権力の座についたプーチンは、明らかにベレゾフスキーと距離をおくようになっていま

した。

ベレゾフスキーは、プーチンが五月に提案した、一連の大改革(P43参照)に反対。

一九九〇年代の混乱と無秩序を勝ち抜いてきたベレゾフスキーは、ソ連時代のように中央政府やその長が絶大な力をもつことを、快く思わなかったからです。

ベレゾフスキーは、一度プーチンに会い、説得を試みますが、プーチンは聞く耳もたず。

二〇〇〇年五月三〇日、その態度に腹をたてたベレゾフスキーは、プーチンに「公開質問状」を出します。

ここでベレゾフスキーは、「連邦管区の創設には反対。こういう重要な問題は国民投票で決めるべきだ!」と抗議しました。さらにベレゾフスキーは六月一日、記者会見を開き「プーチンは独裁の道歩んでいる!」と批判します。

ベレゾフスキーの頭のなかには、自分に従順だったころのプーチンがいたのでしよう。

しかし、プーチンは、ベレゾフスキーに従うような男ではありませんでした。

たとえばみれば「猫のふりをしたトラ」。

このベレゾフスキーの一連の行動に、プーチンは激怒します。

ベレゾフスキーは、「傀儡大統領を立てることに成功した! これで俺の権力と資産は安泰だ!」と喜んだのもつかの間。プーチンが大統領になってわずか一ヶ月後には、その権力を失い始めていたのです。

プーチン、いつせいに新興財閥狩りを開始

新興財閥が、グシンスキー逮捕に抗議したという話をしました。

プーチンは、「誰が俺に反対しているのか？」を注意深くチェック。そして、検察を使って、彼らをいじめ始めます。

その手始めとして、最大の反プーチン派、グシンスキーが逮捕されたのは二〇〇〇年六月でした。残りの新興財閥に対するいじめはその直後から始まるのですが、細かく書くとキリがありませんので、翌七月の検察の動きを見てみましょう。

インターロス 検察は二〇〇〇年七月、民間投資会社、インターロス・グループのポターニン会長に、一億四〇〇〇万ドルの支払いを要求します。なんでも、ノリリスク・ニツケルが一九九〇年に民営化された際、同社の価格が過小評価されたのが原因だとか。

ルクオイル 税金警察(日本でいうと、マル査)は同七月七日、ロシアの石油最大手、ルクオイルを、脱税の容疑で告訴。

メディア・モスト ご存じ「ロシアのメディア王」、グシンスキーの会社。同七月一日、検察とFSB(旧KGB)は、メディア・モスト本社を家宅捜査。傘下の民放最大手NTVから、同局設立書類などを押収。

アフトバス ロシアの自動車最大手。税金警察は七月二二日、大型脱税の容疑で同社を告訴。

統一エネルギーシステム ロシアの電力独占企業(その後、二〇〇八年の電気事業改革で解体さ

れた)。ロシア会計局は七月二三日、「統一エネルギーシステムが一九九二年に民営化された際、同社株一五%が違法な手段で外国人投資家に売却された疑いがある」と発表。

このように、当時ロシア経済やメディアの中核と根幹をにっていた巨大企業が、いつせいに検察などから告訴、摘発されたのです。

これがすべて「偶然よね」と思える人がいれば、その人は相当「平和ボケ」です。

この、検察、税金警察などの異常な動きを見た新興財閥は、「ひよつとして、俺たちはヤバイこととしているのではないか？」とビビり始めます。

そんな折、プーチンから彼らに一通の招待状が届きました。

二〇〇〇年七月二六日、プーチンは、新興財閥軍団と、歴史的な会談をしました。

その場には、当時のロシア財界を代表する新興財閥のほぼ全員が出席したといっても過言ではないでしょう。

そこには、誰がいたか……。P 52の一覧表をご覧ください。

ここから、プーチンと新興財閥軍団の会話を紹介しますが、どうも日本語にすると、プーチンの迫力が伝わりません。できるだけロシア語の印象をそのまま伝えるために、文体を意図的に「文化的じゃなく」しておきます。あしからず……。

いよいよ会談が始まると、財閥軍団はいつせいに騒ぎ始めます。

「ロシアは法治国家じゃない！」

「そうだ、そうだ！」

2000年7月26日、プーチンとの会談に臨んだ 新興財閥のメンバー

人名	経営基盤および役職
アレクペロフ	石油最大手、ルクオイル会長
ベンドウキゼ	オビディニョンニエ機械会長
バグダノフ	石油大手、スルグトネフチガス会長
ボルロエフ	ビール最大手、バルティカ社長
ヴァインシュトク	原油運搬会社、国営トランスネフチ会長
ヴェクセリベルグ	シビルスコ・ウラルスク・アルミ社長
ヴァヒレフ	天然ガス世界最大手、ガスプロム会長
デリバスカ	アルミ最大手、ルースキーアルミ会長
ザポリ	広告代理店大手、ビデオ・インターナショナル社長
ジミン	携帯電話大手、ヴィムペルコム社長
カラチンスキー	IBS情報ビジネスシステム社長
キセリョフ	巨大産業グループ、銀行大手、イムペクス銀行頭取
コガン	工業建設銀行プロムストロイ銀行頭取
リシン	製鉄会社大手、NLMK社長
モルダシェフ	鉄鋼大手、セヴェルスタリ社長
ポターニン	民間投資会社、インターロス会長
プガチョフ	銀行大手、メジプロム銀行頭取
プギン	自動車大手、GAZ社長
ホドルコフスキー	石油大手、ユコス会長
シュヴィドレル	石油大手、シブネフチ会長
フリードマン	金融産業グループ最大手、アルファ・グループ、石油大手、TNK会長

プーチンは、軍団をにらみつけながら、口を開きます。

「おい、人のせいにするなよ！

そういう国にしたのは、おめえら自身じゃねえのか？」

軍団は、あまりの正しさに黙ってしまいます。

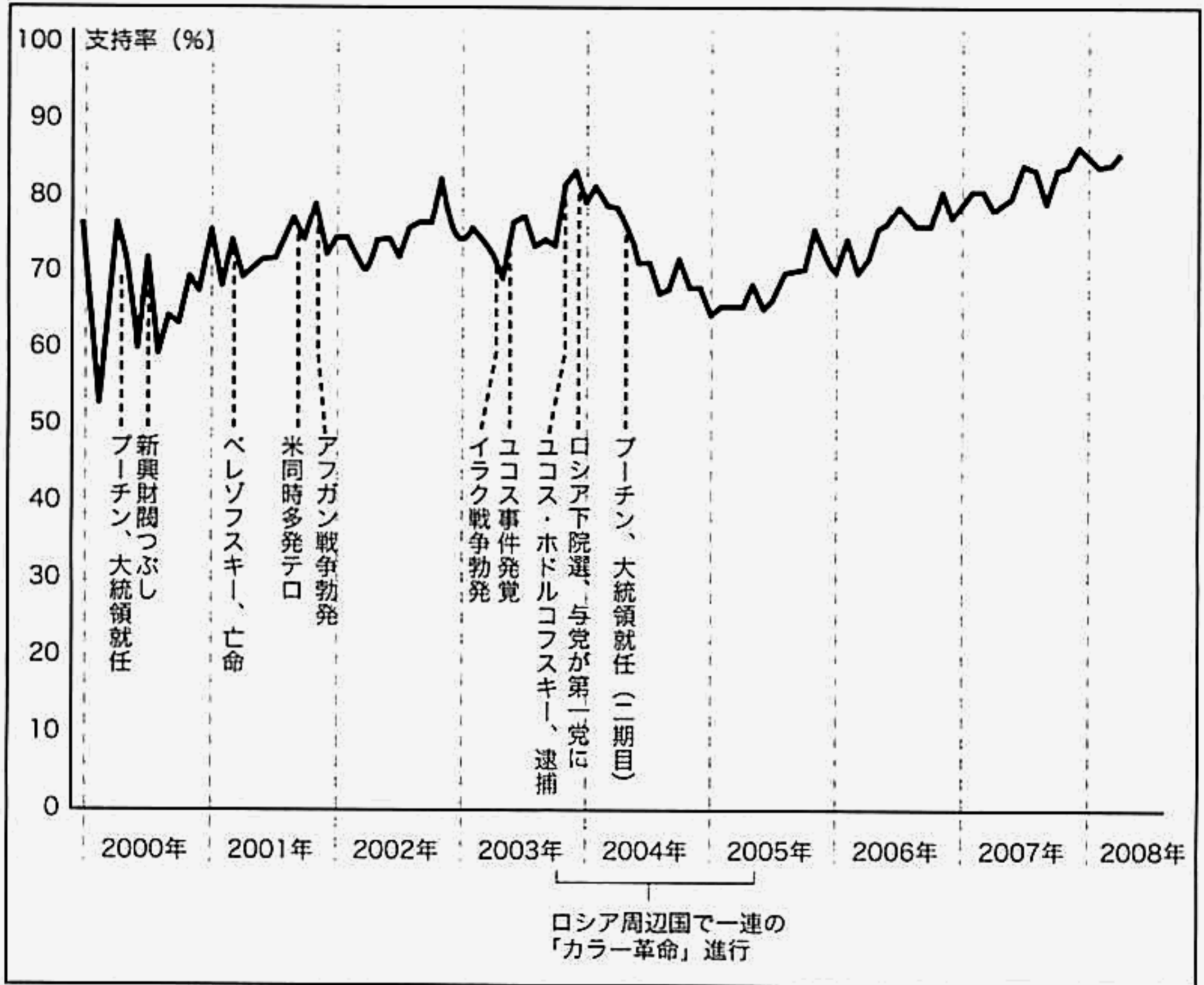
プーチンは、「検察の動きは、自分とはまったく関係ない」とシラを切ります。

「俺はね、民営化の見直しをするつもりなんかねえんだよ。だが、司法がやってることを止めることはできねえな（ニヤリ）」

軍団は、冷や汗をかきながら、黙っているしかありません。

しかし、有力者ポターニンが、勇気をふるって検察の動きについて質問します（既述のように、こ

プーチン、大統領就任中の支持率推移 (2000年～2008年)



出典: ロシア・レバダ法律分析センター 2009

の会談の直前、検察は彼に一億四〇〇〇万ドルの支払いを求めていた。

プーチンは、逆に質問し返します。

「じゃ、おめえは、自分が正しいことを裁判で証明できるのか？」

ポターニンは、あまりの怖さに怯えながら、小さな声で、「……はい。できます」と答えます。

するとプーチンは、

「それなら証明すりゃあいいじゃんよ。なにビビってんだ、あ？」

プーチンは次に、石油最大手ルクオイル会長アレクペロフのほうを見ると、

「おめえの会社は、税金少ししか払ってねえな。原油生産量は(ロシアで)一位なのに、一トン当た

りの納税額は七位じゃねえか！」

アルファ・グループ会長のフリードマンが、「ロシアには、司法改革が不可欠だと思うのですが……」と遠慮がちに提案。

それを聞いたプーチンは、こんなことをいいます。

「俺らの国には、もっと重要な問題が山ほどあるんだよ。司法改革なんて優先課題じゃねえよ！」

この会談の一部始終をテレビで見たロシア国民。

憎き新興財閥を抑えてくれる強い指導者が、ついに現れたことを知りました。

プーチンの支持率は、大統領選挙があった二〇〇〇年三月時点で五三%だった。それが八月、一気に七三%まで上昇！ 以後、プーチンの支持率は、その大統領任期中のほとんどの期間、七〇%を超えるようになりました。

ベレゾフスキーの敗北

さて、「飼いた手に手をかまれた」（と本人は思っていた）ベレゾフスキー。その後も、「反プーチン勢力を結集しよう」と政治活動を続けていました。しかし、形勢はどんどん不利になっていきます。

しかし、彼には、一つ重要で強力な武器がありました。

それが、半官半民のテレビ局、ORTです。

ロシアの「三大テレビ局」といえば、当時もいまも、国营「エルティエルRTR」、民放「NTV」に、「OR

T」（現在は「1チャンネル」と改名）。

ベレゾフスキーは民間人でありながらORT株四九%を所有し、しかも報道内容自体も支配していた。このORTは、一九九九年一二月に行われた下院選挙と翌年の大統領選挙で、プーチンの勝利に大きく貢献しました。

しかし、ベレゾフスキーとプーチンが対立し始めると、ORTはプーチンに批判的報道を繰り返すようになっていきます。

既述のとおり、そもそも二人の仲は、二〇〇〇年五月の大統領就任直後には険悪になっていました。しかし、それを決定的にした事件が、二〇〇〇年八月一二日に起きた「ロシア原子力潜水艦クルスク沈没事故」でした。

フィンランドの北方バレンツ海で事故が起こった直後、一一八人の乗組員のうち数十人は生存していましたが、しかし、救助の遅れで全員亡くなることになったのです。

このとき、プーチンは黒海沿岸の保養地ソチで休暇中。

彼は、自分がいきなり現地に飛べば、「すわ！ 大統領が来た！」と、現地当局者はあわてふためき、逆に救助作業の妨げになるかもしれないと思ったのかもしれない。しかし、少なくとも休暇はやめて、モスクワに帰ってくる。そして、現地からの報告を聞き、指示を出すべきだったのでしよう。

ベレゾフスキーのORTは、「プーチンを一気に窮地に追いこむ絶好のチャンス到来！」とばかりに、「クルスク乗組員家族が苦しむ映像」と「ソチで休暇を満喫するプーチンの映像」を交互に流します。

事故は一二日に起きた。プーチンがモスクワに帰ったのは、一週間後の一九日。さすがに、これ

は国民から反発をくらいました。

確かにこれはプーチン自身の失敗でしたが、彼は「ベレゾフスキーがORTを使って、意図的に大統領のイメージを傷つけた」と思ったのです。

いや、確かにそういう面もあったのでしよう。ベレゾフスキーはプーチンと対立していて、あらゆる機会をとらえて「反プーチン運動」を行っていたのですから。

プーチンがモスクワに戻った翌日の八月二〇日、ベレゾフスキーはクレムリンに赴き、プーチンに会いました。そのときの様子を、再び『リトビネンコ暗殺』という本から引用してみましよう。

へプーチンはフォルダーを一冊持って入ってきた。そして公務をこなすような事務的な態度で話し始めた。「ORTはいちばん重要なテレビ局だ。政府の影響が及ばないところに置いておくには、重要すぎる。だから決定した」などと言った。

やがて突然ことばを切り、潤んだ目を上げて言った。「教えてくれ、ボリス(筆者注:ベレゾフスキーの名前)。私にはわからない。どうしてこんなことをする? どうして私を攻撃する? 私があなたを傷つけるようなことをしたか? 信じてもらいたいんだが、私はあなたの脱線をずいぶん大目に見てきたんだぞ」

「ワロージャ(筆者注:プーチンの名前、ウラジーミルの愛称)、ソチにいたとき、きみはまちがいを犯した。世界じゅうのテレビ局が——」

「世界じゅうのテレビ局なんてどうでもいい」プーチンはさえぎって言った。「どうしてあ、あなたがこんなことをする? 私の友人のはずだろうか? 大統領になれと私を説得したのもあなただった。ところがいま、私を裏切ろうとしている。何をしたせいでこんな目に遭わ

なければならぬ？」(P2805)

プーチンは「原潜クルスク事故」がらみの報道について、ベレゾフスキーを非難したのですね。そして、「**真実の瞬間**」が訪れます。

ベレゾフスキーは、こんなことをいいました。

「選挙のあとの私たちの会話を忘れてしまったようだな、ワロージャ」ボリスは続けた。

「私はきみに個人的な忠誠は誓わない、そう言っただろうか？ きみはエリツインのやり方を踏襲すると約束した。エリツインは、自分を攻撃したジャーナリストを黙らせようなどとは考えたことすらなかった。きみはロシアをだめにしてている」

「ちょっと待った。あなたがロシアのことを真剣に考えているはずがない」プーチンはぴしゃりと言った。「では、これで終わりだな」(同前P2805～2806)

どうも、ベレゾフスキーは状況の変化を正確に把握できなかつたようです。

ベレゾフスキーは、大統領(エリツイン)を操れた、以前の彼ではない。プーチンも以前の彼ではない。いまや「かつての帝政ロシア皇帝より強大な権限をもつ」大統領。しかも、彼のバックにはFSBや検察がいる。

わかる前に、ベレゾフスキーは、最後の質問をします。

「ワロージャ、ひとつ教えてくれ。私をグース(筆者注：グシンスキーの愛称)と同じ目に遭わせるというのは、きみの考えか？ それともウォロシンの？」

「いまとなつては、そんなことは関係ない」プーチンはふたたび冷たく心を閉ざした人間に戻っていた。「さようなら、ボリス・アビラモビッチ」

「ちようなら、ワロージャ」

会うのはこれで最後になると、ふたりともわかっていた。(同前P286)

翌二〇〇一年一月、ベレゾフスキーは、プーチンに忠誠を誓ったかつての弟子ロマン・アブラモ
ービッチに、ORT株を一億七五〇〇万ドルで売却しました。

もし彼が売却を拒否すれば、クレムリン(＝プーチン)は「ORTを無料でゲットする方法」を必
ず考え出したことでしょう。ですから、実際の価値よりははるかに少なくても、お金を得られたこ
とは、ベレゾフスキーにとって不幸中の幸いでした。

ちなみにベレゾフスキーは、その後どうなったのでしょうか？

ロシアから脱出した彼は、現在、ロンドン在住。ロシア政府は、再三彼の引き渡しをイギリスに
要請していますが、無視されています。

プーチン、新興財閥軍団をついに支配下に

新興財閥軍団の双頭、ベレゾフスキーとグシンスキーが、プーチンにあつという間にやられた
……。

これは、格下の新興財閥たちに大きな衝撃を与えました。

「こりゃ、あかんわ。もう服従を誓うしかない」

そして彼らは、プーチンに「反省文」を提出しました。

日本の「経団連」に相当するのが、「エルエスベーパーRSPP」(ロシア産業・企業家同盟)です。

もちろん、ここには「軍団」企業も入っています。

このRSPPPが二〇〇一年二月一四日に、声明を出します。

曰く「ここ一〇年間の一番大きな過ちは、大企業が国の支配権を独占しようとしたことだと思われる」。

エリツイン時代、新興財閥たちは、経済ばかりでなく「政治」も牛耳ろうとしていました。いや、かなりの程度、「政治」を乗っ取ることに成功したといえるでしょう。しかし彼らは、それが過ちだったと認めた。

つまり、「これから、新興財閥は本業に励み、政治には口出ししません」と誓った。彼らは、「プーチンへの敗北」を認めたのです。

さらに、プーチンにもう一つ朗報がもたらされます。

グシンスキーは、「世界ユダヤ人会議」の副議長でしたね(P47参照)。

彼は、同時に「ロシアユダヤ人会議」の会長でもあったのです。

二〇〇一年三月一日、グシンスキーは「ロシアにいない」ことを理由に、「ロシアユダヤ人会議」会長を辞任しました。しかし、これは事実上の「解任」といえるでしょう。そして、同会議は、こんな声明を出しました。

「『ロシアユダヤ人会議』は、政治組織ではない。これまで多くの過ちを犯してきた。しかし、これからは、政治に言及することはありえない」

これは、RSPPPの声明と同じ意味。

「いままでロシアの政治を支配してきてすみません。これからは政治に口出ししませんから、プーチンさん許してください」と。

二〇〇一年三月。大統領選勝利から、わずか一年。

プーチンは、エリツィン時代ロシアを支配していた新興財閥軍団を、完全に屈服させることに成功したのです。

新興財閥軍団は、最初からKGBにハメられていた

こうして、プーチンは新興財閥軍団を屈服させました。プーチンはFSBの長官から「あっ」という間に首相、そして大統領になり、新興財閥をつぶしていった。

でも、いったいどこまでが「偶然」や「幸運」で、どこまでが「必然」だったのでしょうか？

私は、**全部「旧KGBが仕組んだ」**と考えています。

ですから、プーチンのあのセリフ、「私はベレゾフスキーになりたい！」も演技だったと。なぜそう思うか。

ここでもう一度、一九九九年末の下院選挙時の状況を振り返ってみましょう。

当時、エリツィンの後に大統領になれそうな人物が三人いました。

一人目は、「共産党」党首ジュガーノフ(P35写真)。

二人目は、「祖国・全ロシア」代表プリマコフ元首相(P37右写真)。

三人目は、「統一」のプーチン首相。

「共産党」は新興財閥の影響外にありました。

そして、反エリツイン、反ベレゾフスキーのグシンスキーは、「祖国・全ロシア」のプリマコフを支持した。

一方、グシンスキーの宿敵ベレゾフスキーは、「統一」のプーチンを支持した。

お気づきでしょうか？

プーチンが勝てば、FSBの元長官が大統領になる。

プリマコフが勝てば、これも元KGBの超大物が大統領になる。

要するに、どっちが勝っても「KGB出身者」が大統領になる……。

ベレゾフスキーとグシンスキーは、お互いを「最大の敵」と信じていたため、こんな単純なことに気がつかなかったのです。

では、共産党のジュガーノフが勝ったら……？

共産党はそもそも、「共産主義思想」を信奉している。すでに触れましたが、「新興財閥の会社を全部『再国有化しろ！』」という考え。

もう一つ重要な事実があります。

一九九八年にプリマコフは、「共産党」の支持を得て首相になっている。つまり、彼は新興財閥の天敵、共産党ともつながっていた。

もうおわかりでしょう。

一九九九年の時点で、次期大統領候補として有力だった三人、プーチン、プリマコフ、ジュガー

ノフ。

このうち誰が勝っても新興財閥は「肅清」^{しよくせい}されるように仕組まれていた。でも誰が仕組んだのか？

リトビネンコは、こう語ったそうです。

ヘーチンは民間人のふりをした諜報員というものだ。ヘーチンはKGBの元スパイで、一九九八年にFSBに戻るなり、また同じ仕事についた。あるいは初めからKGBを離れていなかったのかもしれない。もとより忠実でも、誠実でもなく、ボリス(筆者注：ベレゾフスキーの名前)も含めてみんなをだましていた。哀れなオリガルヒ、ボリスは策を弄してヘーチンを権力の座に押し上げ、みずからの天敵—KGBの重鎮たちの手先—に力を与えてしまった。まるで中世の秘密の騎士団のごとく、重鎮たちは権力を握るために二重の戦略をとっていた—表立ってはプリマコフを、裏ではヘーチンを通して。(『リトビネンコ暗殺』

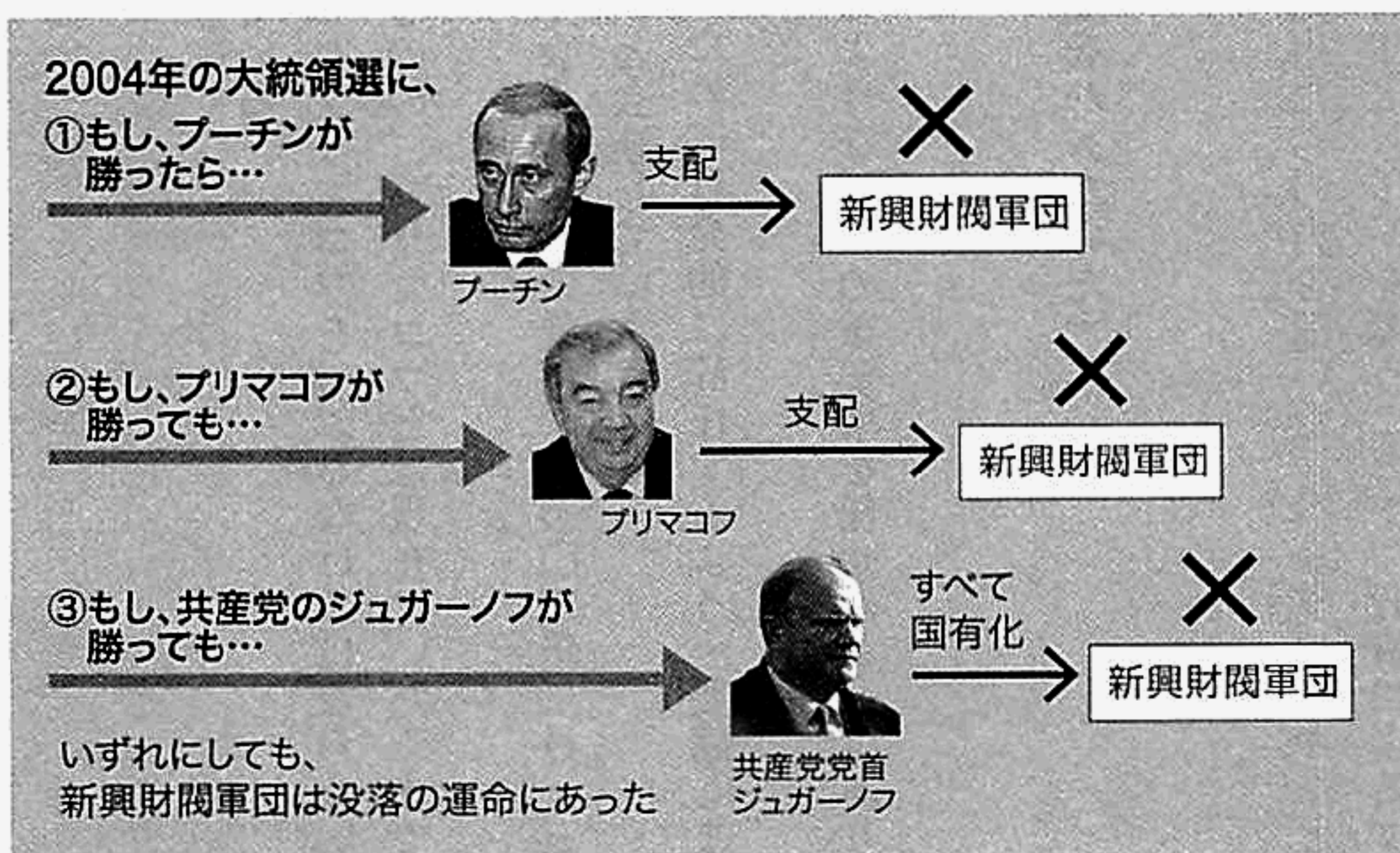
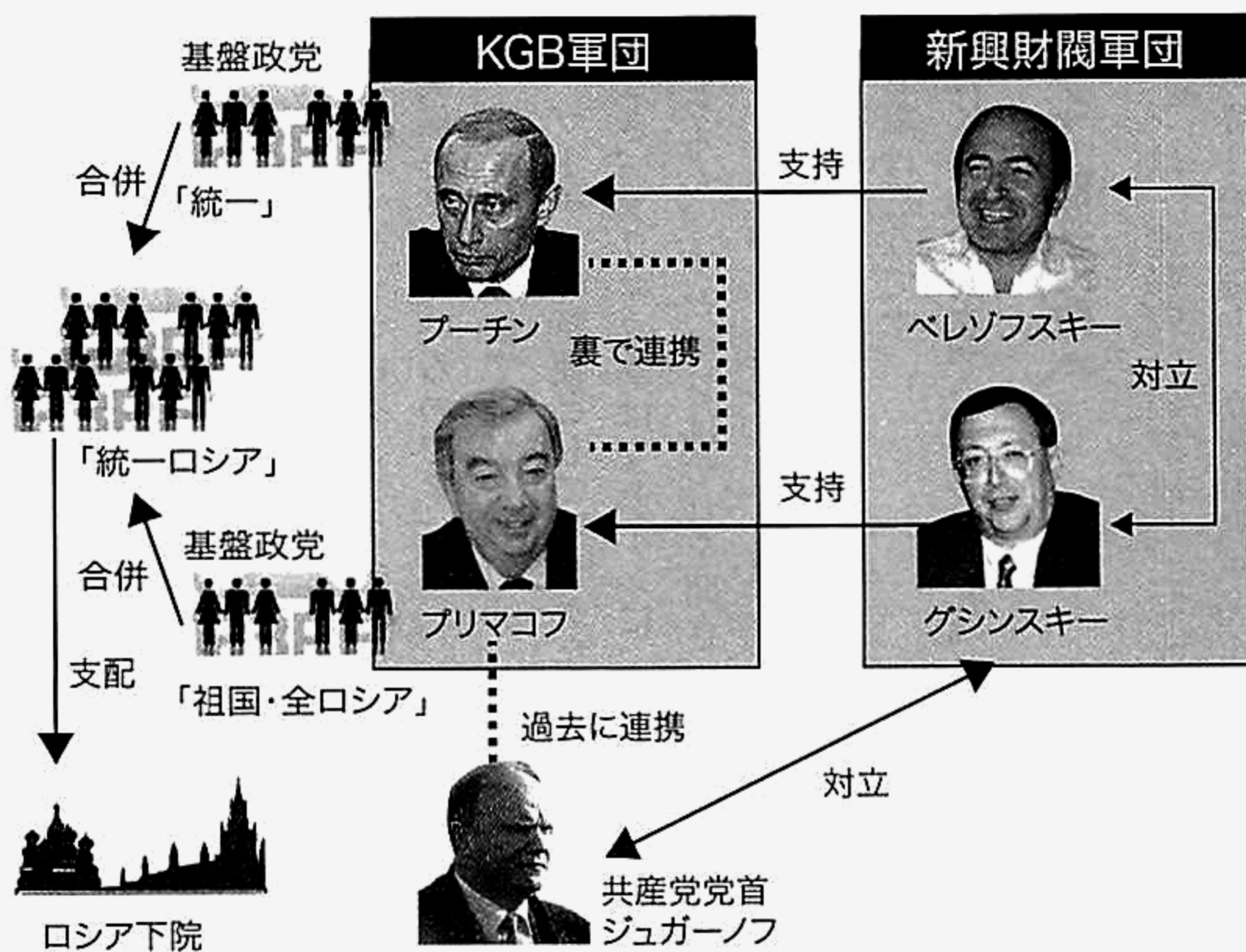
早川書房 P273)

ベレゾフスキーはそれでも、ヘーチンが当時誠実だったことを信じたかったのです。しかし、リトビネンコはいいいます。

ヘサーシャ(筆者注：リトビネンコの愛称)は自分の説の裏づけとして、いくつもの根拠をあげた—ヘーチンが現れたとたん、ルビャンカで「KGB崇拜」が復活したこと、一九九八年一二月一八日におこなわれた「KGB退職者の日」の発言に至るまで。その日、ヘーチンは出席者のまえで、「政府への潜入任務を完了した」と冗談交じりに報告したのだ。(

同前P273～274)

KGBにハメられた新興財閥



もう一つ重要なポイントがあります。

プーチンのプリマコフに対する態度です。

プーチンは、自分の敵を徹底的につぶすことで知られている。

そうであるなら、グシンスキーとつるんで自分に敵対したプリマコフをつぶさなければならぬ。ところが、プーチンはグシンスキーを国外追放にしたものの、プリマコフとは現在にいたるまで良好な関係を築いているのです。

プリマコフのその後ですが、二〇〇一年末にロシア商工会議所会頭に就任。二〇〇三年二月、三月には、プーチンの特使としてイラクを訪問し、フセインと会談しています。

このとき、プリマコフはフセインに、「戦争を回避するために自発的に辞任するよう」要請しました(もちろん、フセインはそれを聞きいれませんでした)。

もしプーチンがプリマコフを信頼していなければ、このような国家の重要事を任せるとはありえないでしょう。

私の結論はこうです。

「二人はKGBの同志で、グルだった。協力して新興財閥をハメたのだ」

ロシア下院支配へ

プーチンは、連邦管区の創設と上院改革で、反抗的な知事たちの力を削いだ。ベレゾフスキーとグシンスキーをつぶし、新興財閥軍団を屈服させた。ORTとNTVを奪うことで、政府によるマ

スコミ支配を確立した。

しかしそんなプーチンにも、一つ不満なことがありました。それが下院。

「なんで共産党が最大勢力なんだ！」

そこでプーチンは、考えます。

下院第二党は、俺の「統一」。第三党は、KGBの大先輩プリマコフとモスクワ市長のルシコフ率いる「祖国・全ロシア」。

「これを統合しちゃえばいいじゃないか？」

思いついたら即実行であります。

二〇〇一年四月から協議が開始され、同年一二月「統一」「祖国・全ロシア」が一つとなり、「統一ロシア」が誕生しました。

以後、「統一ロシア」は下院選挙でずっと一位をキープしています。

二〇〇三年一二月に実施された選挙で「統一ロシア」は、三七・六%の得票率で第一党に。

二〇〇七年の選挙では、六四%で断然一位。

二〇一一年一二月四日の選挙では、四九・三%。

二〇〇七年よりだいぶ減りましたが、それでも二位共産党(一九%)に二・五倍以上の差をつけています。

こうして、プーチンは首尾よく下院を支配することに成功したのです。

天然ガス世界最大手、ガスパロムを支配

新興財閥を屈服させ、議会を支配し、マスコミを手中におさめたプーチン。今度は、「**経済支配**」に乗り出します。

ロシアには、ソ連崩壊後ずっと「世界一」だった企業が一つだけありました。それが、天然ガスのガスパロム。

ロシアというと、すぐ「原油」を思い出します。しかし、実をいうと天然ガスの埋蔵量こそ世界一！

アメリカのエネルギー情報庁(EIA)のデータによると、二〇〇九年時点でロシアの天然ガス埋蔵量は、一六八〇兆立方フィート(P67上図参照)。

ちなみに二位はイランで、約九九二兆立方フィート。その差は歴然ですね。

ロシアはなんと一国で、天然ガス世界総埋蔵量の二五%を占めている。

しかも、その天然ガスをたった一社(ガスパロム)が独占しているのです(正確には九〇%弱)。

「そりゃあ、世界一になるわ」とご理解いただけるでしょう。

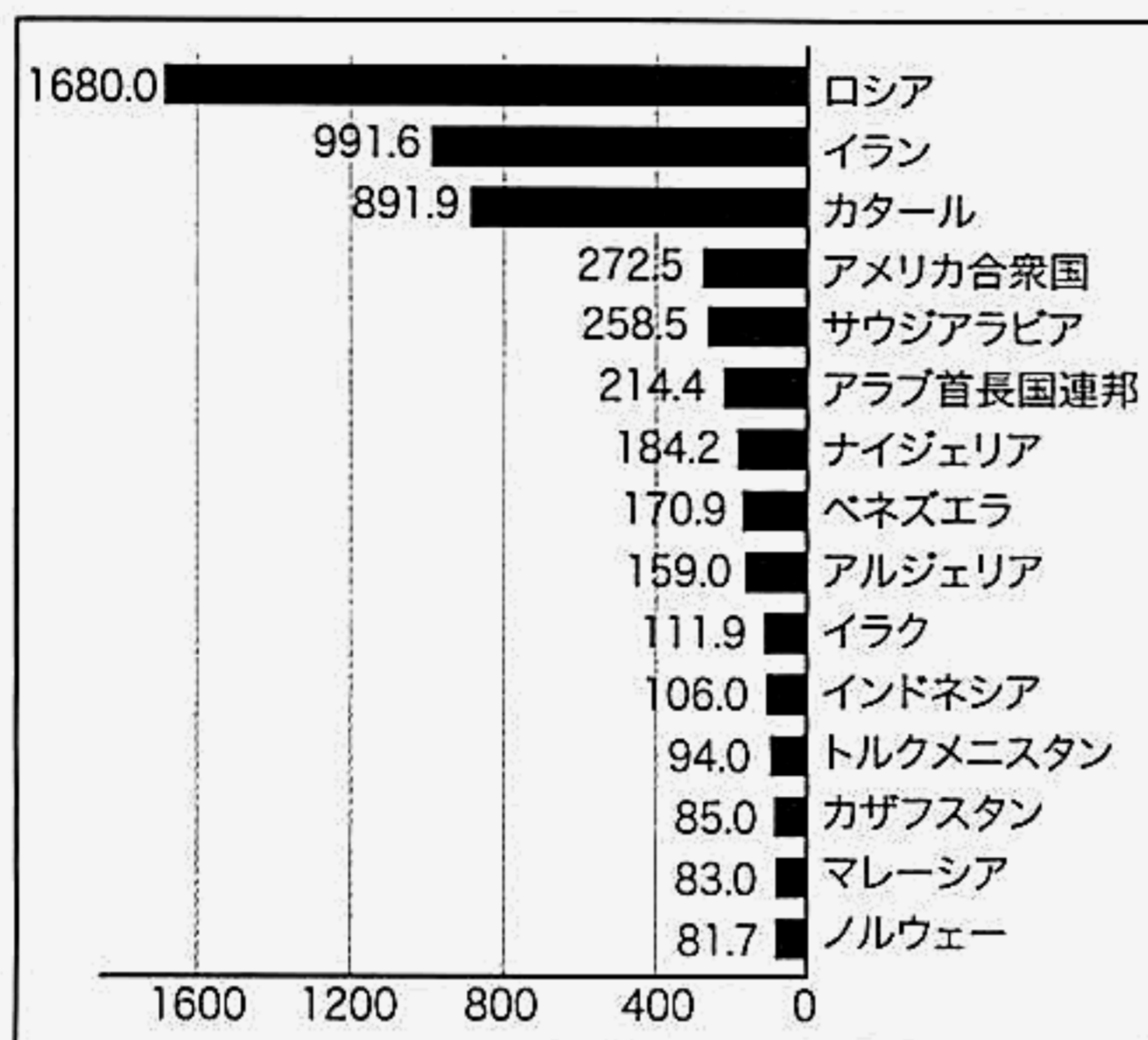
少しこの超重要企業のことを書いておきます。

ガスパロムの前身は、ソ連のガス工業省。それが、ソ連崩壊後、一九九二年に、「ガスパロム」になりました。

初代社長は、ソ連ガス工業相だったチェルノムイルジン。この人は、のちに首相になっています

天然ガス埋蔵量・世界ランキング

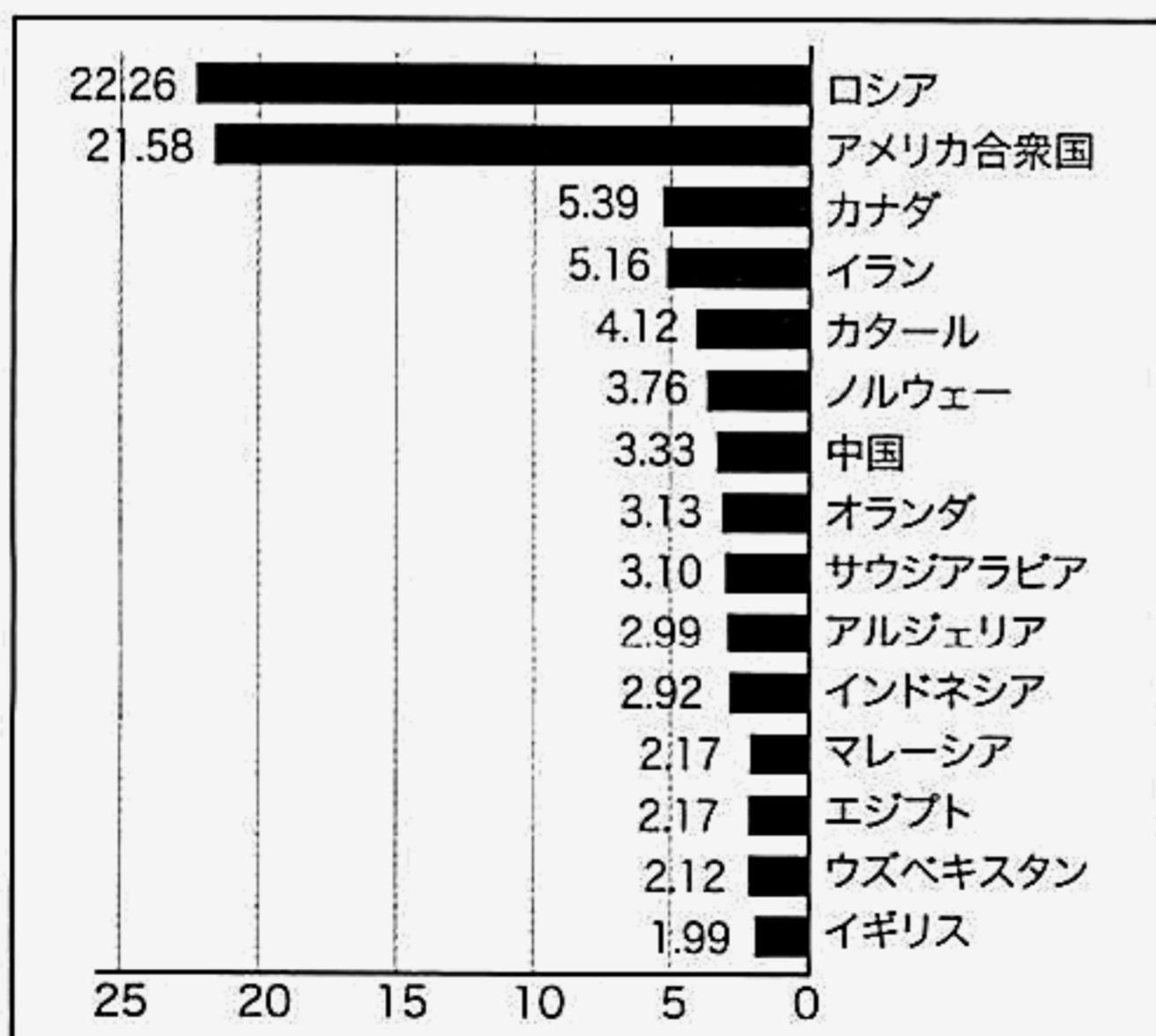
(2009年現在) (単位:兆立方フィート)



出典:アメリカのエネルギー情報庁
(EIA:Energy Information Administration)

天然ガス生産量・世界ランキング

(2010年現在) (単位:兆立方フィート)



出典:アメリカのエネルギー情報庁
(EIA:Energy Information Administration)

(P 29 ~ 30 参照)。
二代目社長は、ヴァヒレフという人物。
この状況を考えてみましょう。
チエルノムイルジンは、ソ連崩壊時「ガス工業大臣」だった。一九九一年、新生ロシアが誕生し「民営化政策」が始まると、ガス工業省の基盤は、そのままチエルノムイルジンのものになったのです。

「うらやましい！」ですね。というか、「ありえない！」です。

で、その後このチェルノムイルジンは、エリツイン政権で、一九九三年から一九九八年まで首相だった。一九九〇年代のロシアでは最長です。

彼はガスプロム出身(初代社長)なので、当然同社を守ります。その結果、ガスプロムの力はどんどん強大化し、「ロシアの中のもう一つの国家」とよばれるようになります。税金だって、払わない。

この辺の事情、小川和男先生の『ロシア経済事情』(岩波新書)で見てください。

ヘムツォフ第一副首相(当時)が一九九七年四月、独占企業体の再編をはかるという立場から、「ガスプロム」にも触れ、政府が同社株の四〇%を保有しているのに、三五%はレム・ビヤヒレフ同社社長が管理権を持つ信託事業で運営されており、政府はそこからルーブルの収入も得ていない、と発言したことに端を発し、マスコミに大きく取り上げられて、大問題となった。(P142)

要するに、政府株四〇%のうち三五%は社長のヴァヒレフが私物化している。そして税金を全然払っていないと。

そして、ガスプロム私物化のせいで、ロシア国民がどれだけ被害にあっているかについて。

ヘムツォフ第一副首相はさらに、「ガスプロム」が約一五兆ルーブル(当時の為替レートで約二六億ドル)という巨額の税を滞納している事実を公表し、これだけの金額があれば、公務員として働いている医師、教員、幼稚園職員すべての賃金を支払えると強調、「ガスプロム」に対する政府の管理強化を主張した。(同前P142)

どうですか、これ？

半官半民の企業が、これだけ巨額の脱税するなんて、ありえませんか。

こんなことができたのは、もちろんガスプロム出身のチェルノムイルジン首相が、同社の悪行に目をつぶっていたからです。

いや、悪行から利益も得ていたのでしよう。

そのせいで、公務員の給料が出なかった。

当時、ロシアの公務員の給料は月一万円とかのレベルでした。それさえ何ヶ月も払ってもらえず、全国で大規模なデモが起きていた。国民が、このガスプロムの現状を知ったとき、どれだけ怒ったか想像できるでしょう。

で、ガスプロムは第一副首相のネムツォフにいわれて滞納分を払ったの？

（その結果ビヤヒレフ社長は滞納分一五兆ルーブルの約半分七兆ルーブル（一二億ドル）以上を支払うことに同意し、政府との妥協が成立した。）（同前P142〜143）

これもすごい話ですね。

普通脱税したら「追徴課税」で、脱税額よりも多く払わなきゃならない。

ところが、ガスプロムは、上から目線で「しゃあないなく、じゃ、半分払ってやるよ！ ああ、うざい」という感じ。

このヴァヒレフ社長は、その後捕まるでもなく、平気な顔して業務を継続していたのです。

しかし、「悪銭身につかず」。彼らの栄華は、KGBプーチンの登場で終わりに近づいていました。二〇〇一年五月三十一日、この日はヴァヒレフの社長任期が切れる日。



(写真左)プーチン(左)と当時のガスプロム社長ヴァヒレフ(右)。(写真右)ヴァヒレフの後、新社長に就任したミレル

プーチンが大統領でなければ、自動的に契約は更新されたことでしょう。しかし、五月三〇日、ヴァヒレフ社長と三人の取締役が、クレムリンによべれます。

プーチンは開口一番、

「おまえには、辞めてもらうからな」

社長と三人の取締役は、頭のなかで真っ白になります。プーチンは続けます。

「質問あるか？」

あまりの急展開にだまってしまった彼らに、プーチンは、

「おい、はつきりしねえか！」

かつて「もう一つの国の皇帝」とよべれたヴァヒレフも、**GBの皇帝にはかきません。**

しぶしぶ「質問はありません」と辞職に同意したのです。

社長と取締役の同意(?)をとりつけたプーチンは、同日ガスプロムの取締役を全員よびつけます。

プーチンは「ヴァヒレフには辞めてもらうから。後任はミレルにやってもらう」と宣言。ミレルは当時、エネルギー省の次官をつとめていました。

誰からも文句が出ないことを確認したプーチンは、ミレルの紹介をします。

「ミレルは若くて(当時三九歳)、俺が信頼している男だ。ビジネスの経験もあるし、最新の経営方法も熟知している」

一応「そ、そ、そうでございますか!？」と相槌を打っておきました。

こうしてミレル新社長が誕生することになったのです。

しかし、ミレルって何者？

彼は一九六二年、プーチンの故郷レニングラードで生まれました。レニングラード財政経済大学を卒業。一九九一年から一九九六年まで、サンクトペテルブルク市対外関係委員会に勤務。当時、委員会の議長はプーチン副市長でした。

一九九六年、サプチャーク市長が選挙で敗れると、プーチンの副市長辞職と同時に(P26参照)、ミレルは株式会社「サンクトペテルブルク海港」に就職。一九九九年〜二〇〇〇年、株式会社「バルト・パイプラインシステム」代表取締役。二〇〇〇年八月よりエネルギー省次官。

そして、二〇〇一年六月より、ガスプロム社長。

要するに、プーチンは、「自分の友人」を世界最大のガス会社の社長にしたのです。

ミレルはプーチンに忠実らしく、いまだに社長をやっています。

ちなみに、国家にとって、ガスプロムの経営陣が替わった(替えられた)ことは、よかったようです。

ガスプロムは、ロシアの国家税収の約二五%を占めている。

経営も効率化され、時価総額は二〇〇六年、世界三位になっています。フォーブスの「世界有力企業ランキング二〇一〇」では、一五位。

「ソ連ガス工業省」出身のヴァヒレフが、ガスプロムを私物化し、放漫経営を続けていれば、このような発展はなかったでしょう。

プーチン以前、完全崩壊していたロシア経済

そろそろ、「プーチンがいかにロシア経済を復活させたか」を書こうと思います。

しかしその前に、「プーチンが大統領になる前、ロシア経済はどうだったのか」に触れておく必要があるでしょう。

新興財閥誕生の話はしました。

GDPの動向を見てみましょう(P73グラフ参照)。驚きますよ。

一九九二年マイナス一四・五%!

どうですか、みなさん?

いったいどうすれば、マイナス一四・五%になるのでしょうか?

その後も地獄は続きます。

一九九三年マイナス八・七%。一九九四年マイナス二二・七%。一九九五年マイナス四・一%。

一九九六年マイナス四・九%。一九九七年〇・四%。

お、ようやくプラスに転じたぞ!

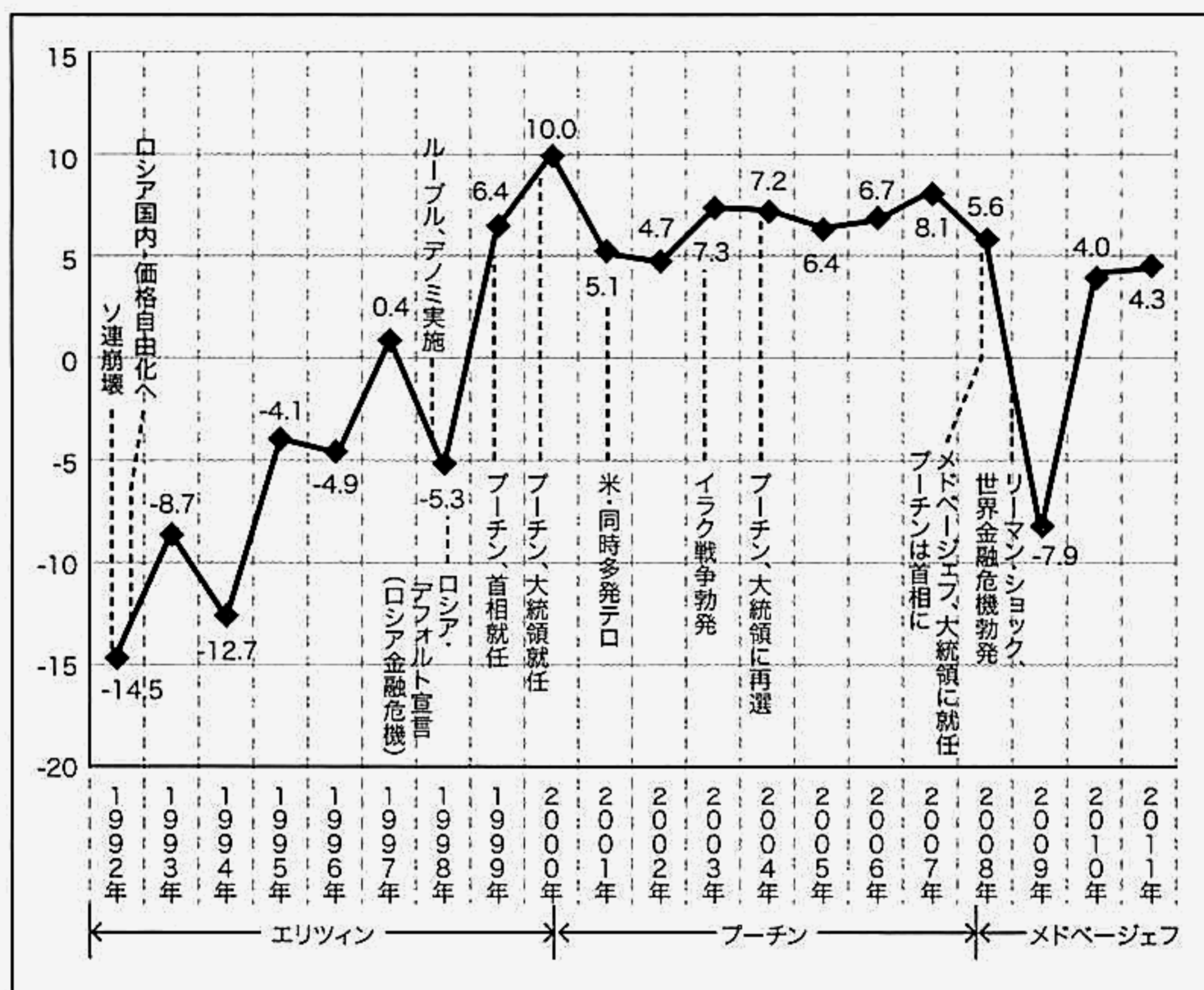
ところが、翌一九九八年に「ロシア金融危機」が起こった。

それで一九九八年マイナス五・三%。

もう、自由落下です。

ロシアの実質GDP成長率(%)推移

(1992年~2011年)



出典: Rosstat / ロシア連邦国家統計

なんでこんなことになってしまったのでしょうか？

いろいろ説明はあると思います
が、要するにロシアの政治家も役
人も経済学者も、資本主義が全然
わかってなかったのでしょうか。

前にも書きましたが、新生ロシ
アは金がなかったため、IMFか
ら多額の借金をした。

しかし、IMFは、お金を貸す
にあたって「条件」を出すわけ
です。

どんな要求をされたのか？

- 政府による経済管理の廃止
- 大規模な民営化
- 価格の全面的自由化の推進

民営化したらどうなったかは、
もうみなさん、ご存じのとおりで
す(P 27参照)。

しかし、私は新生ロシア経済が崩壊した一番大きな理由は、「いきなり市場を全面開放してしまったこと」だと考えています。

それまで、ソ連はいつてみれば「鎖国状態」だったわけです。

品物の数も足りないし、品質は全然ダメ。でも、一応「国産品」がありました。生活のすみずみまで「ソ連製」があった。

たとえば、電話、テレビ、冷蔵庫、掃除機、洗濯機、自動車、服、靴、バッグ、家具、食料品等々。

ところが、政府が市場を突然「全面開放」した。すると、どうなります？
中学生でもわかります。

(ロシア人から見ると)超高品質の商品が西側から洪水のように流れ込んだ。

勝てませんよ、ロシア企業。だって、技術力に二〇〇〜三〇〇年の差があるのですから、一社も勝てません。

その結果、強制的に民営化されたロシア企業はバタバタつぶれていったのです。

それこそ、「草一本残らない」感じ。

ちなみに、ロシアはそのときの衝撃からいまだに立ち直っていない感じですよ。生活していて、食料品以外は、ほとんど「国産品」を見かけません。たまに見かけたと思ったら、外資系企業がロシア国内で生産しているとか。

もう一つは、為替をいきなり自由化してしまったこと。

ソ連は崩壊した。崩壊した国の通貨なんて、誰がほしがります？

そもそも、ソ連はアメリカと並ぶ世界の超大国だった。だいたい一ルーブル＝一ドルという感じで交換されていたのです。それが、ソ連崩壊後はどうでしょう？

一九九二年一ドル＝四一五ルーブル！

その結果、ものすごいインフレがロシアを襲います。

一九九二年のインフレ率は、二六〇〇％！

二六〇〇％のインフレなんて、ちよつと想像できませんね。

たとえば、お米がいま、一キロ八〇〇円するとします。

これが、一年後には二六倍、二万八〇〇円（！）に跳ね上がっている。

Aさんには、一〇〇〇万円の貯金がある。

この貯金の実質価値は一年後、三八万円（！）まで下がっている。

うーん。これは、どんなおだやかな人でも怒るぞ。

こんな感じで、ロシアは堕ちていった。

一九九八年、ロシアのGDPは、一九九一年のソ連崩壊時と比べ四三％（！）も減少していました。

平均月収は八〇ドル。一ドルが一〇〇円とすると、八〇〇〇円。

共産ソ連を崩壊させ、欧米では「英雄」と称えられるエリツィン。

ロシアでの評価はどうなのでしょうか？

経済がこんな感じだったので、エリツィンの人気は最低。

政権末期の支持率は〇・五％（！）程度だったのです。

私は、はつきり理解しました。

「人には『自由』より『めし』が大事なのだ」と。

もちろん、腹いっぱい食べたなら、今度は「自由」がほしくなるのですが……。

デフォルトを行った一九九八年、ロシア経済は転換点に

エリツイン時代の一九九八年八月一七日、ロシアはデフォルト（債務不履行）、具体的には「対外債務の九〇日支払い停止」を宣言しました。

ソ連崩壊後沈み続けてきたロシア経済に、追い討ちをかける金融危機。

しかし、振り返ってみれば、一九九八年がロシア経済の「底」だったので。

「プーチンの神通力じんつうりきで経済は復活した！」といたいところですが、そうではありません。

プリマコフ首相（当時）が立派だった。

プリマコフは、大きく二つの政策を行いました。

一つ目は、石油・ガス会社への徴税ちゆうぜいを強化すること。

ガспロムが税金を払わないせいで、どんなことになっていたか、すでに書きました（P 68参照）。しかし、ガспロムと石油会社は、その後もおおっぴらに脱税していた。

ガспロム出身のチェルノムイルジン首相が、同社と石油会社を保護し続けていたからです。

ところが、チェルノムイルジンは、一九九八年三月、エリツインに解任されてもういない。

一九九八年九月に首相になったプリマコフは、新興財閥から買収されていないKGBの大物ですから、遠慮なく徴税をするようになった。

こんな単純なことですが、ロシア経済はこれで安定しました。

二つ目は、外貨売り上げの七五%をルーブルに交換することを義務づけたこと。

これはどんな意味があるのでしょうか？

一九九八年八月一七日から始まった金融危機で、一番大きな問題は、ルーブルが再び急落していたことでした。八月、一ドル＝六ルーブルだったのが、翌九月には一六ルーブルまで下がった（P80グラフ参照）。

これって、どのくらいのインパクトでしょうか？

一ドル＝七五円が、一ヶ月後には二〇〇円（！）になる感じ。

しかも、プリマコフが首相になった時点で、下落が止まる気配はいつこうになかったのです。

このままでは、また何百%というインフレ時代に逆戻りしてしまう。

どうすればいいのだろうか？

プリマコフは、資本主義の私たちから見ると、とてもユニークな解決方法を見つけました。

彼は、「輸出で儲かっている石油・ガス会社にルーブルを買わせればいいではないか？」と考えたのです。

石油やガスなどの決済通貨はドルなので、ロシアの石油・ガス会社も、輸出すればドルを受け取ります。

たとえばA社は、原油を輸出して一億ドルを得た。そうしたらその七五%、七五〇〇万ドルはルーブルと交換しなければならぬ。いかにもアメリカに怒られそうな「反市場経済的」方法ですが、しかし、プリマコフ首相は元KGB。経済担当副首相のマスリュコフは共産党。

だから、市場経済なんてどうでもいいのです。

この政策で、ルーブル需要が強制的につくられ、ルーブルは一気に安定していきます。

前述のとおり、八月、一ドル＝六ルーブルだったのが、九月には一六ルーブルまで下がった。

しかし、一〇月は一六ルーブルの水準を保ち、十一月には少し下げて一七ルーブル。

以後ルーブルは、経済に混乱を起こさないレベルで緩やかに下がっていききました。

一九九八年八月に危機が起こったとき、誰もが「これでロシアは終わりだ」と嘆いたものです。

しかし、プリマコフが行った二つの政策により為替は安定し、インフレも沈静化。税収も増え、

財政も安定しました。金融危機の混乱は、彼の活躍により、わずか数ヶ月で収束したのです。

プリマコフが首相をつとめた八ヶ月、ロシアはなんと四%の経済成長をはたしています。

参考までに、ガイダル首相代行の時代はマイナス一三・二%、チュエルノムイルジン首相時代マイ

ナス二七・四%、キリエンコ首相時代マイナス三・二%。

これを見ると、プリマコフがいかに「奇跡の人」かがわかります。

一九九九年、ロシアは通年で六・四%成長。

長く苦しかった暗黒時代がようやく終わろうとしていました。

プーチンとロシア経済に吹いた原油高騰の「神風」

二〇〇〇年、いよいよプーチンの時代が始まります。

この年、ロシア経済には「神風」(?)が吹き始めていました。

ロシアは、世界第二位の原油輸出大国。

原油価格とロシア経済成長率の推移 (1991年～2011年)



出典: Rosstat(ロシア連邦国家統計)およびIMF Primary Commodity Prices

そう、原油価格が急上昇し始めたのです。

原油価格は、タイ発の世界金融危機(一九九七年)の影響で、低迷していました。しかし、プーチンが大統領になるころ、危機も一段落し、上昇基調にあったのです。

原油価格はその後、二〇〇一年のアフガニスタン戦争、二〇〇三年のイラク戦争による中東情勢不安定化により、大暴騰していくこととなります。

そもそも、一九七〇年代ソ連経済が好調だったのは、石油ショックで原油が高騰したから。

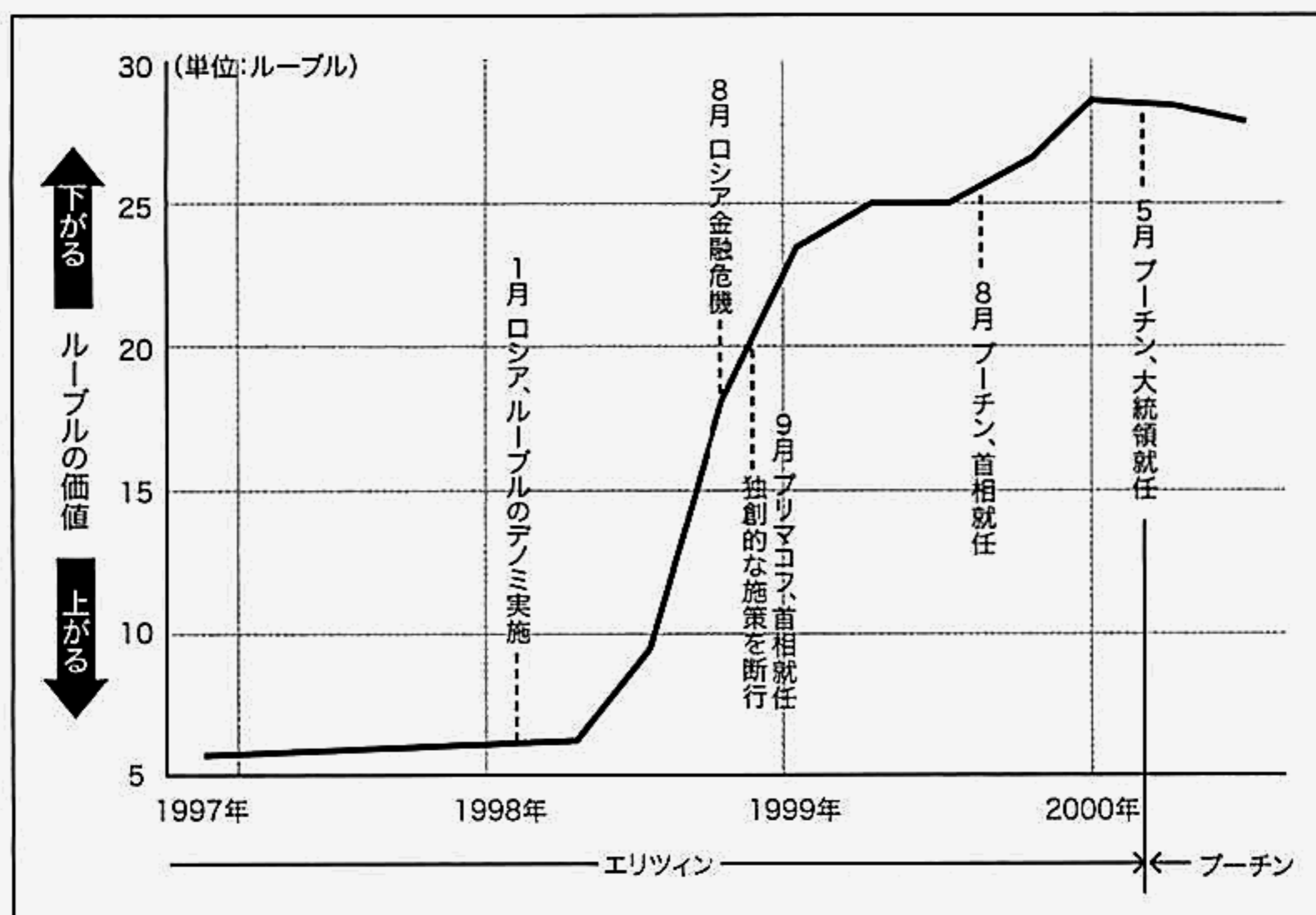
ではなぜ一九八〇年代、ソ連経済はボロボロになったのか？

原油価格が低迷していたから。

金融危機が起こった一九九八年、

ルーブルの対ドル為替レート・推移

(1997年～2000年)



出典: Rosstat / ロシア連邦国家統計

ロシア産原油の価格は、一時一バレル〇八ドルまで下落してしまいました。通年でも一四ドル。

ところがプーチンが大統領になった二〇〇〇年、原油価格は「待ってました!」とばかりに急騰していきます。

ロシア産原油価格は一時、一バレル〇三五ドルまで上昇。

通年でも一九九八年のちょうど二倍、二八ドル。

そのため、原油、石油製品、天然ガスの輸出額は、前年比で七〇%以上増加しました。

二〇〇〇年、もう一つの「神風」は、ルーブル切り下げがプラス要因に転化したこと。

既述のように、危機が起こった一九九八年八月、一ドルは六ルーブルでした。

プリマコフの措置で下落スピードは緩やかになりましたが、二〇〇〇年三月時点で二八ルーブルまで下がっていた。

つまり、一年半でルーブルは四・七分の一になった。一ドル七五円が、三五〇円になった感じ。このことは、ロシア経済に大きな混乱を引き起こしました。たとえば銀行の半分が倒産に追い込まれた。

しかし、プーチンが大統領になったころ、安いルーブルはプラス要因に転じていたのです。どういうことでしょうか？

ルーブル下落で外国製品の価格が暴騰した。国民は輸入品を買えなくなり、いやいやながらもロシア製品を買い始めた。それで、一九九二年の「ショック療法」で瀕死の重傷をおったロシア企業が、息を吹き返した。

もう一つのプラス効果は、外国でロシア製品の価格が下がり、競争力がついた。それで輸出がドンドン増えていきます。

原油価格とルーブル安効果により、ロシアの輸出は、前年比で四〇％増加。

貿易黒字は、前年の三四三億ドルから六九一億ドルに倍増。

さらに、税収増加により、ソ連崩壊後初めて財政黒字に転換しました。

二〇〇〇年、ロシアは、なんと一〇％の成長を達成。

人々は、プーチンを「神のごとく」思うようになっていきました。

ここまで読まれて、「なんだ、結局プーチン時代にロシアが成長し始めたのは『運』か!？」と思

われる人もいるでしょう。

確かにそのとおり。しかし、「運」の部分は半分でしかありません。

もし、プリマコフとプーチンが新興財閥を服従させていなかったらどうなっていたでしょうか？ 原油高で新興財閥はますます富む。彼らは思う存分脱税できるので、ロシア政府と国民はまったく恩恵を受けられず、ますます窮乏するという結果になったでしょう。

プーチン、三つの経済革命を断行

プーチンというと、「財閥いじめ」ばかりしていたと思いがち。

あるいは、「原油高に支えられたラッキーガイド」と。

ところが、プーチンは一期目、その経済政策において「革命的」ともいえる三つの大改革を実行しています。

一つ目は、**土地の私有と売買を自由化したこと**。

何度も書いていますが、ソ連時代は「私有財産」がなかった。当然、「私有地」もない。

ソ連崩壊から一〇年たっても、ソ連時代そのままの状態だったのです。

しかし、二〇〇一年一〇月「土地基本法」が採択され、土地の私有や売買が、一部ですが認められるようになりました。

二つ目と三つ目は、「**税制改革**」。

まず、**所得税減税**。

ロシアの所得税率はそれまで、一二％、二〇％、三〇％の三段階でした。

これを二〇〇一年度、なんと一律二三%にしてしまった。
次に、法人税減税。

ロシアの法人税率は二〇〇二年、これまでの三五%から二四%まで一気に一一%も引き下げられました。

減税によって税収は減ったのでしょうか？

いえいえ。逆に激増したのです。

なぜ……？

大幅減税で、巨大な「ロシア地下経済」が表に

日本人から見ると、ロシア人のおもしろさはいろいろあります。

たとえば「納税意識」が全然ない。

私の友人のイリーナさんは、書店を経営しています。彼女は、熱心なロシア正教徒で、朝晩きちんとお祈りをし、日曜日の礼拝をかかしません。きわめておだやかで善良な人。困った人がいれば、助けずにいられないやさしさをもっています。

そんなイリーナさんに税金の話聞いてみると、「全部なんか払ってない」とシレ〜つといいいます。

その理由を聞くと、「法律どおりに払ってたら倒産しちゃうから！」と笑います。

良心の呵責が全然ないのですね。

「それは神様から見ると罪ではないのか？」と聞くと、「そんなことない」と自信たっぷりな答え

ます。なぜかというところ、「彼ら(政府)は、集めたお金を自分の懐たしなに入れちゃうから」。

考えてみると、ソ連時代、政府は宗教を弾圧していました。いまのロシアでは「信教の自由」が保障され、ロシア正教などは大復興している。

しかし、ロシア正教の信者が政府を見ると、かつて自分たちを弾圧した旧共産党とか旧KGBばかり。だから、「彼らに税金を納めなくても、神様は逆に喜んでくださる」という意識なのです。

やはり知人で、営業の仕事をしているイワンさんが勤める会社は、社員の給料を実際の五分の1くらいの額で税務署に申告しているそうです。

もちろん、給料を低く申告すれば、払うべき所得税も減りますね。

社員はみんな知っているのですが、誰も不信に思ったり、社長を密告したりはしないそうです。なぜか聞いてみると、「みんなやってるから」との答え。

では、脱税させてもらっているイワンさんは悪人か？

これが、メチャクチャいい人なのです。彼の妹は、寝たきりの父親と住んでいます。彼は、毎日仕事の帰りに妹の家により、父親をお風呂に入れてあげます。妹は寝たきりのお父さんを持ち上げられませんから。奥さんや子供との仲もよく、友人から信頼も厚いのです。

彼も、脱税していることについて、まったく良心の呵責を感じていないようです。

良心の基準は、国によっても人によってもさまざまということですね。

さて、いまでもこんな感じですから、一九九〇年代はさらにトンデモナイ状況だった。

再び小川和男先生の『ロシア経済事情』から引用してみましよう。

へ米国の学者やシンクタンクは、ロシアでのアンケート調査をはじめそれぞれ独自に実施した調査・分析にもとづいて地下経済をもっとずっと大きく評価し、その繁栄はロシア国民の生活向上に貢献しているという結論に達している。A・シャーマ・ニューメキシコ大学教授は、

・ロシアの私营セクターはロシア経済全体の半分を占めていながら、その生産・販売実績と利益の九〇％は税務署に申告されていない、

・ロシアの実際のGDPと人口一人当り所得は、おそらく公式統計の数字の二倍に達する、
・ロシアでは昨今、副業に就いている人が多く、副業からの収入が大きい場合が多いが、ロシア人は通常、私的に稼いだ所得は税務署に申告する必要がないと考えており、実際にも申告してない、などと指摘（P91～92）

九〇％は税務署に申告されていない！

一九九〇年代はこんな状態だったのだと思います。

しかし、税率が下がり、脱税の取り締まりが厳しくなるにつれ、「捕まるリスクをおうより、一三％くらい払ったほうがいい。枕を高くして眠れるってもんだ」と考える人が増えた。

それで、地下経済が表に出てきて、一気に税収が増えることになったのです。

その結果、個人所得税収は二〇〇一年、前年比で二五・二％増加。二〇〇二年は二四・六％、二〇〇三年一五・二％、二〇〇四年一四・四％それぞれ増加し、ロシアの財政黒字国化に大きく貢献しました。

エリツイン時代とプーチン時代、これほどの違い

さて、ここまでプーチンが大統領になってから行ったことを書いてきました。

ここで一度まとめをしてみたいと思います。

エリツイン時代（一九九一年～一九九九年）末期とプーチン時代（二〇〇〇年～二〇〇八年）で、ロシアはどんなふう変わったのでしょうか？

●下院

エリツイン時代は、大統領の宿敵、共産党が第一党。

野党が下院最大勢力であるため、機能不全になっていました。

日本でも「ねじれ国会」などといいますが、あれがもっとひどくなった感じ。

プーチンは、下院第二党「統一」と第三党「祖国・全ロシア」を統合し、「統一ロシア」を結成。やりたい政策がスムーズに実行できるようになりました。

注目すべきは、「統一」と「祖国・全ロシア」が、一九九九年の下院選挙時「敵」だったということ。ことです。

●上院と地方の首長

エリツイン時代、連邦構成体首長が、上院議員を兼務。

首長たちは強大な権限をもち、地方で汚職の限りをつくし、私腹を肥やしていました。

プーチンは、連邦構成体首長が上院議員を兼任することを禁止。

さらに、クレムリンが、連邦法に違反した地方首長を解任できるようにします。

そのため、「いつクビになるかわからない」首長たちは、中央に従うようになりました。

また、プーチンは七つの連邦管区を設置。

將軍などを全権代表として送り込み、地方を監視・監督させるシステムを構築しました。

●新興財閥

エリツイン時代。新興財閥は大統領と癒着することで、莫大ぼくだいな利益を得ていました。

ガスプロム出身のチェルノムイルジン首相が、石油・ガス会社を保護したことから、脱税が横行。

そのため、国は公務員給与を数ヶ月滞納せざるをえなくなるなど、甚大じんだいな被害を受けていました。

プーチン時代。プーチンは、新興財閥の二大リーダー、ベレゾフスキーとグシンスキーを事実上国外追放。

残った新興財閥はプーチンに服従を誓い、税金を納めるようになります。

そのため、ロシアの税収は激増し、財政黒字を達成しました。

●マスコミ

エリツイン時代、ORTを支配するベレゾフスキーとNTVを所有するグシンスキーが自由自在に国民を洗脳していました。

プーチン時代、ベレゾフスキーとグシンスキーを追放したことで、クレムリンは三大テレビ局

(RTR、ORT、NTV)の支配に成功。

「言論の自由」は「大統領を批判しない」という条件つきになりました。

●経済

エリツイン時代、ずっとマイナス成長。一九九二年～一九九八年までにGDPが四三%も減少。一九九八年にはデフォルトし、「もはやロシアは立ち直れない」と誰もが思っていました。プーチン時代。プーチンが大統領になった年は、いきなりGDP一〇・〇%成長を達成。以後、二〇〇八年まで毎年平均七%程度成長し続けます。これが一番の奇跡です。

●政権支持率

エリツイン時代。一九九一年のソ連崩壊時、九〇%を誇ったエリツインの支持率は、経済改革の失敗でみるみる下がりました。

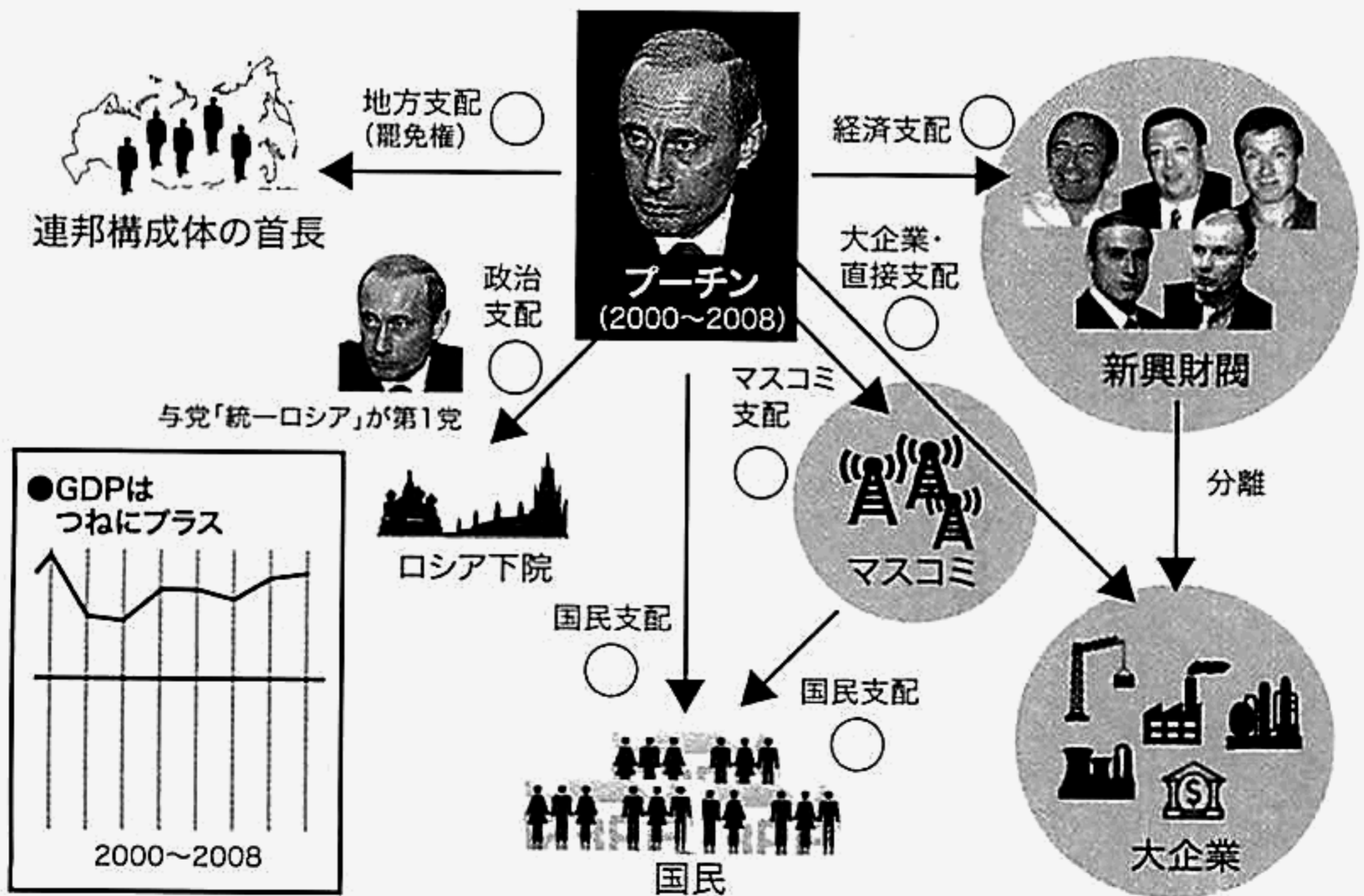
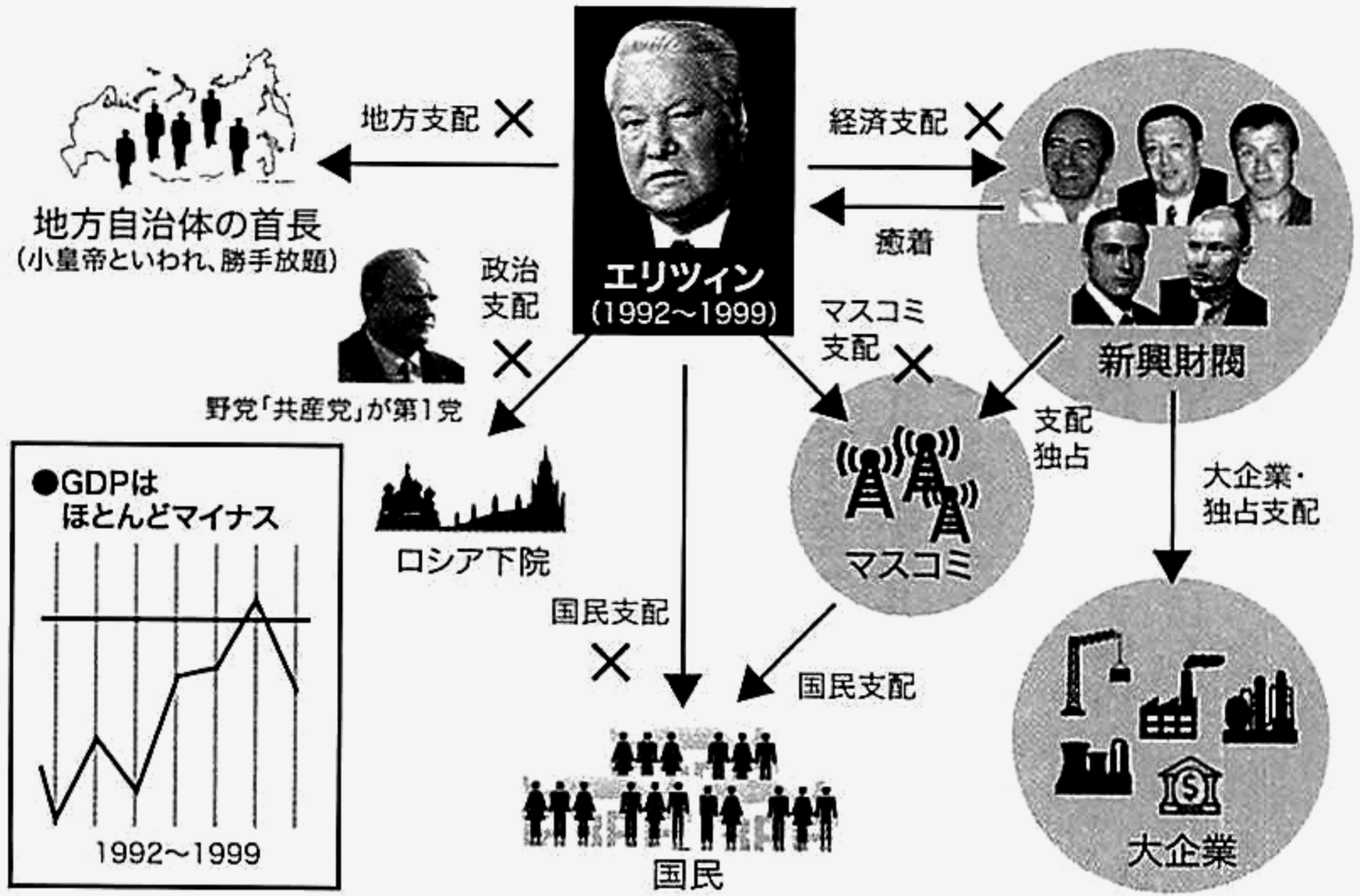
一九九六年の初めには五%になっていましたが、新興財閥軍団の強力なサポートにより、なんとか再選。しかし、その後も病気がち。景気はさらに落ち込んでいき、人気は上がりません。

政権最末期、支持率はさらに低下し、〇・五%程度でした。

プーチン時代。五十数%台からスタート。

しかし、ベレゾフスキーを追放し、新興財閥を従わせ、さらに経済が急成長を始めたことから支持率は急上昇。

エリツイン時代とプーチン時代、これほどの違い！



以後、ほとんどの期間七〇%以上の支持率を維持しています。

どうでしょうか？

やはり、リーダー一人の力は大きいのです。

一、二年で、全然別の国に生まれ変わってしまうのですから。

さて、ここまで一九九〇年代から二〇〇二年くらいまでを中心に書いてきました。

プーチンはこの年までに、混乱の極致にあったロシアに秩序を取り戻し、経済を成長軌道に乗せることに成功しました。新興財閥や地方の首長たちも従順になり、「もはや敵なし」と思えたのです。

しかし、「いつかプーチンを打倒し、俺が大統領になってやる！」と決意していた男がいた。彼は、米英の支配者層と結託することで、政権を奪えろと考えていました。

その男の名は、ミハイル・ホドルコフスキー。

このプーチンとホドルコフスキーの壮絶な戦いは、世界の支配者たちと、KGB軍団の代理戦争でもありました。

プーチンの戦いの舞台は、ロシア国内から、いよいよ世界へと移っていったのです。

詳しくは、第2章で明かすことにしましょう。

プーチン最後の聖戦
北野幸伯 著

発行・集英社インターナショナル 発売・集英社
定価 1,600 円 (本体)+税
ISBN 978-4-7976-7225-1

ウェブでのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ!](#)